

389-51



\*1200700236798\*

口  
複  
写



始





川路柳虹詩集

現代詩選

— 2 —



1921

---

新潮社版



## 序

自分の詩集「路傍の花」(明治四十三年出版)「かなたの空」(大正三年出版)「勝利」(大正七年出版)の三冊より抄出して一卷となしたのがこの書である。おぼつかない足どりで歩みながらも、今最初の自分の選集を出すことが出来るやうになつたことを喜んでゐる。そしてこれらの目を顧みて自分はいかに報ひられざる勞苦に努力してきたかを考へる。そしていかに悪い戦ひを戦つてきたかを考へる。且つそれらの集が自己の貧しい囊中からしぼり出した結果であつたことを考へても淋しい氣さへ起る。併しとも角自分はこゝまでできたのだ。自分の現在の詩風はこの集のものより更に推移してゐる。それらを一巻に纏める前に、自分の既往を明らかにしておきたい願ひからこの詩集は編れた。而してこの選集



I種

W



\*1200700236798\*



を出したあとで自分は最近の新しい歩みを更に示したいと思つてゐる。

私は大局からみて、現在の日本の詩はまだ過渡の時代にあり、吾々は種々な試練をなしてゐる一種のアルケミストであると思つてゐる。金がえられるか、合金がえられるかはもとより各自の知りうる所ではない。ただ自分の信ずる方向を開拓してゆくところに、個性としての發展を期するところに詩の完成があらうと思ふ。自分は過去の自分の詩を顧みてその「路傍の花」時代の印象主義、デカダン気分、「かなたの空」時代の象徴主義、及びその後半から「勝利」へかけての理想的傾向——それを嘗て自分は本然主義と呼んだが——すべてが傾向は異りながら、やはり一個の自分といふものゝ推移であり、變化であつて、異つた衣装はつけても自分の個性には變りないことを信じてゐる。自分の所有してゐるものがあるとしたら、それらを通じた一個の個的な特質がほんとの所有であらうと思ふ。たゞしそれらの批判は讀者に任せるより仕方がない。が、自分

は今の文壇にあつて餘りに詩の價值が低く見られてゐることに憤慨してゐるものである。自分はこの點に於て倨傲とも見える迄の態度に於て、自分の詩の價值批判を多くの人から強要したいとさへ思ふ。今迄嘗て一度も自分の歩みが正當に認められ、批判されてゐないことに對して、自分は正しいプロテストを提出したいとさへも思ふものである。

大正十年四月

著者



勝利目次

III	II	I	地上頌歌	苦患の日に	祈禱	生きた	良き夜	畑	耕	童
想	愛	律	歌	に	禱	活	夜	人	話	話
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
一九	二三	一九	一九	一八	一七	一六	一三	一一	八	四







かなたの空

秋	.....	一三四
十月の雨	.....	一三六
たそがれ	.....	一三六
期待	.....	一三〇
暮春の幻想曲	.....	一三三
蟾蜍	.....	一三四
夜樂	.....	一三六
芽	.....	一四一
素晝	.....	一四三
風景	.....	一四三
静物	.....	一四七
ふれりうど	.....	一五一
焔	.....	一五四

影のMODELE	.....	一五六
李の花のちる頃	.....	一五八
心	.....	一六〇
海邊消息	.....	一六三
鏡	.....	一六六
あけがたの雨	.....	一六九
パステル	.....	一七一
にほひ	.....	一七四
秋のおもひ	.....	一七六
雪はふりつむ	.....	一七九
記憶	.....	一八一
田舎	.....	一八三
月と風との對話	.....	一八五
山上の星	.....	一九〇
光の歌	.....	一九二



闇	.....	一九三
古い物語	.....	一九六
贖	.....	一九八
凝視	.....	一九九
哀訴	.....	二〇一
曉をみるために	.....	二〇七
幸福	.....	二〇九
かなたの空	.....	二一一
まどはし	.....	二一四
現實	.....	二一六
正しきエビキュリアン	.....	二一八
鴉	.....	二二〇
相	.....	二二二
箴言	.....	二二四
言	.....	二二五
葉	.....	二二七

路傍の花

飛躍	.....	二二八
吐息	.....	二三〇
彷徨	.....	二三六
月光と薔薇	.....	二三〇
顫音	.....	二三二
ODELETTE	.....	二三三
涙	.....	二三四
LIED	.....	二三五
九月	.....	二四七
私はその聲をきいてゐる	.....	二四九
空は吾らの上に晴れてゐる	.....	二五三
賞讃	.....	二五五
街の雨	.....	二五七



薄暮の瞳	二六〇
屋根の上に	二六二
秋	二六四
夕	二六六
病兒の夢	二六八
小	二七二
暮春の光り	二七四
月	二七七
心のはて	二八〇
丘の上の花	二八二
鼠	二八五
印	二八九
わかれのとき	二九二
暴風のあとの海岸	二九五
音	二九八

壁のうちに	三〇一
小	三〇三
曇	三〇五
曇	三〇〇
日	三〇四
塵	三〇七
バタの鐘	三一一
雨	三一二
救	三三四
港	三三六
空のはてには吾もみる	三三九
畏	三三三
怖	三三三



川路柳虹詩集



勝

利



## 童話

路にある一本の樹木、その葉は黄金、  
その幹も黄金、その枝も梢も黄金、  
しかし春がきても秋がきても  
その花も咲かず、實も結ばず、  
ただ風が緑に灰いろに  
その樹をめぐるばかりに年が経つた。

園丁が或る日不思議なその樹を見て

『さても見ごとな樹でありながら

花の咲かず實のならないのは

きつと培養が足りないからであらう』と

さつそく土を掘り下げてそこへ培養を積んだ。――

さて、來年の春は見ごとな花が咲かうと。

やがて春になり、その葉の金の耀きは

空を煙らすばかりに眩しく輝き出した、

園丁は寶物が手に入るやうに

やがて咲くその花を待つてゐた。

けれども、その葉の蔭には何ひとつ花らしい影さへも見られない、

その間に夏がきてその葉は涼しい影を敷いた。



園丁にほつくりが思つた、「これは尊い樹に違ひない、花は咲かなくとも育て次第で實は出来やう、黄金の實が出来るに違ひない、もつと培養こやしをやつてやらう」と、そして丹誠な心で秋を待ちもうけた。けれどもその樹は依然として、實みをつけないどころか今度はその葉の光りさへ衰へたやうな氣がした。

そこで園丁にほつくりは腹だたしく

『こんな莫迦はか々々しい樹があるものか  
人が折角丹誠するのに、實も花もつけないとは情ないなさけ、  
こんな樹はみんな葉をむしつてやれ、  
もう育てる必要があるものか』といきなり

その黄金の葉を一枚樹からもぎ取つた、  
すると何たる奇蹟ふしぎであらう、その樹は音おとを出し、  
身震ふまでその光りは園丁にほつくりの眼を射つて  
幹から明らかな言葉が出た。――

『摘みとれ、摘みとれ、永劫に摘みとれよ』と。



耕人

土は固い、土は冷い、忠實<sup>まじめ</sup>やかなの耕人よ、  
きみの腕<sup>かじな</sup>のくだくるまで鋤をば揮ふ耕人よ、  
空は銀色の黄昏<sup>たそがれ</sup>、鈍い柘榴<sup>ざくろ</sup>を滲ました日のひかり、  
影かとはかり枯れた梢も交<sup>まじ</sup>る遠い森、  
あゝ無窮の果までも肩をのばし、  
その伸びやかな體軀を横へた土よ、地平よ、  
遮るものもない空に浮く鋤もつ人の姿、

「永遠」をこぼちゆく「時」のごとく、  
しづかにおごそかに黙つた足どり。

土は固い、土は冷い、忠實<sup>まじめ</sup>やかなの耕人よ、  
きみの瞳はいつもただ地を映<sup>うつ</sup>す、  
また日光と雨と霧とを、雲と虹と星とを窺ひ見る、  
けれどもきみの腕はいつも地に下りる、  
黒いふかい土の上、また揺れる麥の上、  
黄金<sup>こがね</sup>の穂の上、碧玉<sup>あまにじゆ</sup>の野菜のうへに、  
さながら珠玉を覓めて海に下<sup>くだ</sup>る人の如く。

土は固い、土は冷い、忠實<sup>まじめ</sup>やかなの耕人よ、  
きみはよしないこの世の「理<sup>ことわり</sup>」を知る、



苦患を噛み、苦患に耐へ、さては鋤ふる腕の瘤をば愛する、  
 きみの手は暗い畝のふちに泥を黄金にかへすまで、  
 青い葡萄を紫の酒に醸すまで、土を踏む耕人よ、  
 土は聖い、土は楽しい、女の肌より  
 あゝその土壌の下に絶えず流れる温い血の音——きみの踏む足の下に  
 きみの瞳に、きみの腕に、あゝきみの鋤もつゆゑに  
 苦患は愛となる、土は緑となる。

## 焰

しづかな秋のまひるに  
 たひらかな野の上で藁塚が燃える、  
 紫の煙が空にほそくのぼり  
 かげらふがあたりにゆらめく。

地は大きな翼をやすめた鳥のやうに  
 音もなくよこたはる、そのうへに



雨とふる日光、煙はさながら  
呼吸のごとくに土の裂け間から逃れる。

しづかな秋のまひるに  
たひらかな野の上で墓塚が燃える、  
燃える、燃える、だん／＼と紅く膿もち  
蟲のごとく地平を火は這ひまはる。

焰よ、しかし、しづかな  
音もなく立ちのぼる焰よ、  
なにもものにかひかれゆくごとくに  
痛ましくも喘ぎながら地にひれ伏す。

## 良き夜

快く雨は土に匂へり、  
九月の宵のふかみゆく草のかけ、  
ひそかに祈りするものゝ如く  
心こめたる肅ましき歌に  
世界は蟲の響となる。

時計の音も静かな宵かな、



われ足音を立てずとも  
しだいに迫りくる空気が  
なにものか力ある聲に叫び、  
新しき果物の匂ひの  
濕りたる土より息をはなてば  
涼しき瞳は隠れたるところに笑へり。

われに鞭くびきをかくるものなし、  
われに作いつはりを教ゆるものなし、  
風のきたればしづかに  
簷のきばの風鈴は鳴ることく、  
われあたへられたるものを正しく  
わが心のまゝに響かせむ。

快く、しづかに  
雨は永遠の世に煙れり、  
われ灰色の衣ころもをぬぎすてゝ  
ねがはくばねぢけたる微笑を  
わが神のまへにほどかむ。



生 活

おまへの腕うでを信ぜよ、  
焦立いらだつ心のなかに。  
さうして嵐はれまの時間ときに  
飛躍とつとせよ。

祈 禱

吾にあたへよ、力を、  
吾にあたへよ、希望のぞみを、否  
吾にあたへよ、たゞ  
吾を信まもずるところを。



苦患の日に

おまへの力に絶えず  
力を加へよ、  
おまへの悲哀を  
おまへの血で塗れ、  
暴風のおそふなかに  
眠れよ、  
そして、朝に  
歌へよ。

地上頌歌

I 律

われは心悩む、われは心惹かれる、われは夢みながらに金の駿馬を  
幻の境より引き入れる、  
われは鞭うちわれは足掻き、われの歩みと彼の歩みを、轡の音と拍車の響を、鈴の音と焦立  
つ吐息を、波うつ心と奔れる足並を。  
踏みしめ、合はしめ、なほも夢み、  
浩蕩たる大海の碧の底へ、



波うち沫く闇の巖痛へ、

さてまた微かに消えゆく反響のごとく  
樹立のかなたに水影映かな夜の湖  
蘆の枯葉に戦げる風と黙しうつらふ。

われは童女の心を、

われは感じ敏き指先を、

快き驚きを、

驚きの快樂を、

木の實の澤にむつみ輝くはげしさを、

いつも新に、いつも輝き、いつも夢みる

『生』を、その種子を、不可思議の三昧境を、

恍惚の肉感を、堪へえざる歡喜の源を、

われはのぞむ、われは押し流し、われはか弱き手をば盲目のごとくにさし伸べて  
なほも求む、なほもきけり、なほも踊れり、  
山を、谷間を、岩のあひだを、苦しく堰かるゝ小川のごとくに  
海へ、海へと。

翼は焰に焼かれはてゝ滯潮高い青海原に落ち込んだ。救ひを願ふな、もはや聲なき大海の一  
滴。弱い力が常劫の運命へと流された。

われは悲み、われは腕き、われは苦しき牢獄を夢と地上にかいまみる。  
されど切なき慾望は惱みに燃えて立ち昇り、  
復び空へ、闇黒の空へと赤き炬火を打ち振ふ。

あゝ、いつも嘶き高き金の駿馬よ、

心の底に燃え狂ふ欲念の火を忘れざれ、



鮮やかに攔む腕を失はざれ。

欲するがまゝなるものをその儘の力に任し、

智慧と啓示を自らなる輝きに見出でしめよ。

われは熱き唇をもちしとき、その接吻は甘かりき。――

隠れたる地上の生命を。

汚されたるまことの淫樂を

心ゆくまで飲みしめて杳かなる光り滴る蒼空へ

飛びゆけよ、飛びゆけよ、わが胸の

一つの絲、一つの響よ。

## II 愛

息をひそめて嵐のうちに、

すべてのものの飛び去るなかに、

われを地に就かしむるものを思へよ、

樹にすがる蔦のごとく

吾は執ねくも手をさしのべ、

あらゆるものの凍る夜半に

空に昇りゆく焰を、

その強き足音を



わが脈管のなかに聴く——

われはあらゆる樹木のごとく  
地のうへに立てり。

あゝわれは枝を張り

その根は深き底に喰ひ入る、

吾を壘はすものの地の下にありて

限りなき愉悅と力とをおくる。

吾は乞食のごとく地にひれ伏し

その齒は強き心臓をも嚙むべく

吾を狂はす血の在所をば突きとめむ。

そこに全身掩ふものもなき裸體の女、

恍惚と肉感の愉樂に溺れ、

ほの紅む腕をば緑なす海底に  
夜の星の如き涼しき瞳は髪のかげに  
萬人の瞳を聚む。

吾は古の *CENTAURES*

野山に角の響充つれば

丘をこえ、草を踏み、

酔へる人の足どりさながらに

熟せる木の實を手もて掴み、

快き嵐に浴みて

健かなる肉體を伸ばしえむ。

あゝされどまた夜きたりて、



わが靈は幻のごとく  
谷間の墓によろめきかゝり、  
裂かれたる枝の上に  
雪は屍をあつめ來るとき、  
何の力か、何の息か、  
そこに潜むものもとだえし夜を、  
吾は曳かれ、吾はむなしく、  
惱みのうへに血もてさみしく  
わが腕をばこまねかむ。——  
しからざればただ手もて地をまさぐり、  
盲人の指に世界を知るが如くに  
かしこき智慧をそこに悟らむ。  
われはかの星のごとく

または木の實の香りもとめて  
かなたの森へと飛びゆく小鳥のごとく  
流るゝ翼を大空へと  
一すぢに走らしめむ。  
よし空には果敢なき一點なりとも  
黒くたしかなる存在をば  
晴れわたる空に羽搏たしめむ。  
われはあらゆる樹木のごとく  
地のうへに立てり。  
われはそこに嵐を持ち、  
われは樂しき微風を夢む。  
空に向ひて鳴りわたる木の葉よ、



ふかき底にひそめる根よ、  
あゝ大地の愛を吸ひて  
その脈管を太らせよ、  
地は限りなきものうちに吾を  
空へと伸ばさしむる焔なれば。

III  
想

序曲

泉は鳴る、泉は鳴る、  
人知れぬ洞穴どうけつを潜つて  
遠い緑の道  
その果しなく煙る一線に  
白く輝さわたる日の下に  
泉は鳴る。  
金の帆を上げよ、力づよく櫓をとれよ、



されど胸をどらして自らを失ふな、  
酔ひごこちに  
煙に包まれたる如くに  
薫香にまかれたる如くに  
汝の船を走らせよ。

『吾』は吾に向つて語る、

『碎かれたる薔薇を眺むるより、  
海にすてられたる花片を嗅がむより、  
先づ路上に播かれたる種子を培へ  
種子を培ふ鋤をとれ』と

また『吾』は吾に向つて云ふ

『汝の心を煨けよ、鐵砧の上にたゞけよ、

汝の拳を地に印するまで、  
汝の脂を砂に滴らすまで、  
煉金の味ひを靈に刻めよ』と。

焰は欲求の上に絶えず

心はかつて櫓をおす手の上に  
もどかしき海洋を一すぢに渡らんとす、  
かくて蒼ざめたる夜のごとくに  
白き首をたれては重き纜を  
力盡きたる腕に捲きては歸る  
漁夫の愚さをばまなぶなり。

金の帆を上げよ、力づよく櫓をとれよ、



酔ひごころに、  
煙に包まれたる如くに、  
薫香にまかれたる如くに、  
汝の船を走らせよ。

I

わが欲するものは  
暁の恍惚、華やかに眼覚めくる空と土、  
噴泉の迸り、赤らむ樹木、——  
木はその一葉一葉を  
漲る精力で空に波だたせ、  
一めんに聚りくる光りを

光の尖端を

幹と樹皮と梢に浸透せしめ、  
かぎりなく變化に富む緑を  
大空へと捧げる、

おゝ大地よ、

健かで平和に充ちた大地よ

汝は果しもない強健な肉體を

永遠に静かな世界におく。

争亂の大地、紛擾の大地、憎悪と嫉妬と昏迷の大地、

汝の上で人は國と國を争ひ

領域と領域の割讓を血と劍にかへる、

闇黙の大地、静かで微笑もせぬ大地よ、魂の大地、聖者の大地よ、

不滅な戦が汝を如何やうに揺がすとも



人の「愚かさ」が如何やうに汝を唆かすとも  
笑つてゐる大地よ、花の熾さかんにひらく大地よ。

田園と都市と湖水と丘陵と

かぎりなき反復の稜せうと廣袤くわうぼうと

幾何學的の建築と區劃と設計と

絶大な年月の上に積み重ねられた

膂力と智識との文明、

あゝ大地よ、

おまへはそれらを載せて絶えず輝く、

白日の巨大なランプ、曉きようの薔薇きさうじ

金を延べた田畑たはた、匂におひに咽なぶ花園はなぞの、

おまへは時に處女のごとく微笑し、

おまへはまた尼のごとくも沈黙する。

肉慾の大地、苦行と歡樂の大地、

PAN と BACCHUS との大地

そして また

APOLLON を讚美する大地、

吾は羊にしてまた駿馬しゅんばの狂奔を知る妖獸しんじゆ、

吾はそこに新しき祭壇と焰を、

殿堂と墳墓を、

生々せいせいの緑と苦にがき灰色とを以て象かたどる。

吾を打ちのめす「死」と「悪運」を、凶暴の魔女を、

その毒ある舌のために、刺ある痛みのために、

その陣痛おこりと瘡かさとを、

わが靈たまの苦味として心臓に



强健な血と化して輸入する。

吾は大地の愛のために、

天上の愛を知る。

吾は地の骨をとつて

天上の礎とする。

われは悪魔を驅つて

天使の琴をかき鳴らす。

暁が目覚めた、暁が目覚めた。

地は一齊にその警鐘を亂打し、

太き動脈とあらゆる末梢の血管を

良き靈のために合奏する。

そこには永遠の若さ、——路上を盲ひながら薄明と闇と貧困と

たえず苛み傷かれた魂が蒼ざめ乍らやつてくる、

弱い手をのばしながら一人の若ものが

衰へた肺と燃えつきんとする心臓とを捧げてやつてくる、

まだ路がある、まだ路がある、

汝の歩みそのものが若さだ、永遠を知る若さだ、永遠の生命をもつ誇りだ。

汝を苦める貧困、パンの一片もあたへられない貧困、

しかしながら汝の後に立つ「死」を齒噛みしながら

汝の魂の祭壇を明るくしようとする手をもつて格闘する

その闘ひが世界に幸福の種子を播く

曙だ！

人間の詩の輝く刹那だ、大地と交接する

生きた思想だ、恍惚の管絃樂だ、

吾は嵐の暴力を含む——



その階音の一つ一つに随順する、——随順しうる  
樹木だ、繁り合ふ木の葉の一つだ。

II

焔を採れ、焼くがまゝの焔をとれ、  
森を、山を、都市を、田園を  
焼きつくす焔をとれ、汝の胸に。  
熱愛がすべてだ、象の牙よりも強く、  
麦芽の醗酵よりも熾んなる  
熱愛がすべてだ。  
汝の胸に溢るゝ焔が  
汝の製作を完成する、今あるごとく、

またまさに來らむとする苦熱の如く、  
頭を悩まし、腕を苦める  
偉大な創造よ、汝の詩よ、  
焔のまゝに溶け入れよ、自らなる光を放てよ、  
熔爐に散る火花の如く、重く、執ねく  
汝の思想をそのまゝに響となせ、音階となせ、  
吾に求むるものは樂人の心、人生の作曲家、また聲調を調律し整齊する  
靜思と技巧の彫塑家、——あらゆる面と量と容積とに  
辭句を安泰ならしめる技術家、  
されど計るなかれ、數量する勿れ、  
汝の精神を鑄型に入れて琢く勿れ、  
たゞに驚異を望むなかれ、また精製をのみ求むる勿れ、  
吾が熱愛があらゆる調和を生む、——偏るなき自然の姿を生む、自らなる靜謐を生む。



大地に生へた生へぬきの樹木、  
その上に鳴る嵐、その上に飛ぶ小鳥、  
吾は土塗れに働く耕人の如く  
わが血の流れそとぐ土壌の一塊を  
詩の最上の祭壇に投げつける、  
人生讃賞、地上の頌歌、永遠の詩歌、  
そして、貧しき一人の人間！

詩 人

すべてのものはうたへるなり、  
聲をはなちてうたへるなり、  
われこの幸をきみに願つに  
たゞ貧しくして裸體なり。



## ヴェルアランの死に

血塗れの白耳義よ、痛ましき世紀の上に  
おんみは至上の詩をば植ゑつけたり、  
またと咲かざる花をば、おゝ詩人よ、  
君は弗羅曼の野邊より世界に馳せり。

(千九百十六年十一月二十七日ルーアンより巴里への歸途鐵路に觸れて  
無慘の最後を遂げしと云ふ報せなきし日)

## 風物と吾

周圍は私にとつて  
絶えず歌を歌ふ樂器です、  
山、樹木、湖水、さうして限りない海  
海のはてにつゞく雲、天空、  
みどりの寶玉を一せいに撒き散らした  
あの夜の奥深い蒼穹、  
そこにおのづからなる歌が湧き、琴が亂れ、



千萬年も絶えないランプが燃える……。  
 夜の星と月と、  
 さうしてかすかぎりない響がもつれ、  
 かすかぎりない歌がうたはれる、  
 風に、風につれて動くもの音に  
 または何の音もない空間が  
 静かな時の流れに身をよせかけ、  
 わたしの心と脈膊を合はすとき  
 わたしはたゞひとりの私でない、  
 わたしは風そのものであり、  
 わたしは輝く四邊であり、  
 さうして周圍とともに舞踏する  
 一つの生きもの、一つの感覚、一つの大きな靈<sup>たましの</sup>

私は角を吹く牧羊神の  
 危げな足どりに舞ひつれて  
 かぎりない酒瓶に一ぱいの  
 琥珀の酒をなみなみと覆<sup>くつ</sup>す、  
 盃になほ足りず、喉<sup>のど</sup>の中になほ足りず、  
 胸のなかになほ充ちたらぬ酒の香りの  
 やがて一つの靈を酔はすまで。  
 酔ひしきらすまで。

——私は歌ひつれる、私はをどりしきる、  
 けれども、けれども  
 私はなほ酔ひきらぬ一つの眼をもつて  
 蹣跚<sup>よろめ</sup>く足を周圍の柵<sup>さく</sup>におく。



わたしの心は燃えてゐる、  
 酒精と情慾とかぎりない獲得心と、  
 洗はれた靈と、少女の如き熱望と、  
 あゝわたしはそれらのために充たされ、  
 それらの力によつて心を動かし、  
 それらの動きに従つて與へられ、  
 たゞ吾を充たすことによつて吾を空しくし、  
 吾を空しくすることによつてふたゝび惠まれる。  
 けれども、けれども、  
 わたし自らをながめる一つの眼は  
 不幸にもわたしの周囲を  
 わたしと二つのものに分離する。

わたしの目を盲ひさせよ、

わたしは見えぬ眼によつて眺めえられる、

——一つの世界を。

けれども

風物はわたしの中にかずかぎりなき、

まことにかずかぎりない光りと熱とを以て

吾をそのなかに吸収する。

われはそのなかにあつて籬罌粟の優しき匂ひと、

成熟した果物の樹を落ちる匂ひとを嗅ぐ。

わたしは情人のこまやかな息を肌の熱さを、

手をかけて口を吸ふ肉感を、

わゝわたしの靈のなかに不可思議な

交媾の恍惚を明るく清淨に



聖者の口をからずして眼のあたり  
周囲の香氣のなかに見ゆる。  
わたしは沈黙の種子が吾を躍らし  
吾をかしこに導くを知る。  
わたしは自然の樂手である、  
わたしが歌口に歌を吹きこみ、  
わたしのまことに舞ひつれるとき、  
わたしは四邊の吸盤に  
その足どりのすべてを指揮される、  
わたしはわたしの息によつて、  
樹木の梢にらんまんたる  
花のかどやきをあつめえられる。  
慧しき眼よ、盲れるな、

慧しき心よ、たゆむな、  
そこに湧きいでる焔に  
おまへみづからを見出すまで。



## 颯 風

無際限の空におこる暴力、  
本然の暴力、

思ふがまゝに實行する力の權威。

原始の蠻性、

颯風！ 颯風！

巨人の手先にあしらふ侏儒のごとく  
無慘に犯さるゝ處女のごとく

さながら都會は汝の下に引き倒さる。

颯風！ 颯風！

汝は忘れられたる自然の暴慢を

鮮やかにわれらの前に繰り返す。

積み重ねられた人間の智慧を

一たまりもなく蹴散らす。

まして紙片かみきれにも似た危い建設の都市

貧しい部落の連続からなる東京、

汝の巨手にはあまりに力なき抵抗である、

猛獸の前に横はる昆蟲の一匹、

砂上につくられた文化の儂さ！



手ひどく打ちのめされた都市よ、  
 壊滅された市街よ、自然よ、  
 もの憐れな棺の列が限りなく続いてゆく、  
 白日に照らされた溝渠ほりわりの濁つた水底みなぞこから、  
 いくつとなく掘りかへされる屍しかばね——  
 それらは報いらるべき罪業と悲運との、  
 悪業と背徳との  
 何ものにもかゝはらぬ一つの偶然、理智も聰明も、  
 あゝ自然の良をのがる、瞬間の  
 動物らしい敏捷を失つた悲しさ——  
 裸體となつた人間の無力である。  
 信仰も叡智も剝ぎとられた、  
 衣服も家も剝ぎとられた

人間の無力、悲哀。

底の知れない自然に向つて  
 坑をうがつ吾々の文化よ、  
 おし黙つた土地から、碧の空間から  
 吾らの幸福を織り出す文化よ、  
 はた、それらが啓示する力よ、命よ、  
 私はおまへの胸の上に耳をあてよ  
 寢息を窺ふ盗人ぬすびとのごとくに  
 おまへの祕密を盗み出す、  
 けれどもその上に要求するものは  
 なほも底知れぬ本然の力——  
 あゝ、おまへの胸にある血液、おまへの胸に動く鼓動である。——



湧きいでる宛らの力の  
源である。

颯風！ 颯風！

真夜中の眠りから覺まして

吾を恐怖のなかに投げ出した

颯風！

おまへの吹きすぎる大軍のなかに、

世界を被ひつくす巨大な管絃樂のそのなかに、

吾々を地上から躍らして

血みどろの戦ひのなかに挽ぎ取る、

格闘しても挽ぎ取る、

もぎ取らなければならぬ

一つの勝標がある。

あゝ 空は吾らの夢をかき昏らし、

死と苦惱とはすべてを取り圍く。

けれども無惨にひき倒される

不可抗な力の中心に向つて、

光り輝いた力の中心に向つて、

わが靈は躍り上る。

颯風！ 颯風！ 『未來』の海に吹き荒れる

力のまゝなる颯風！

わたしは真夜中の恐怖から立ちあがり、

折り亂される樹木の梢に、

おまへの吹きすぎる足下に



祈念の焰を赤々と燃え立たす——

『吾にあたへよ、力を、力の源を』と。

吾はそこに吾の贏ち得る

たゞひとつの曉をば待ちのぞみ、

吾を彼方へとひたむきに進ます

血ぞめの旗風を身に浴びる。

あゝ、その亂れ戦く屍の都市に、

その蒼ざめた棺に、

白々と輝きわたる平和な朝の日光！

その碧の空の光りを

豊かな飽満を、

あゝ、汝の吹き荒るゝ力の上に

吾は待ちのぞむ。

(大正六年九月三十日夜東京を襲ひし颱風の吹き荒れしあとにて)

### 過ぎゆくものと生

昨日の目をながめよ、今日は屍骸となつた昨日の目をながめよ。

過ぎ去る亡霊の影とうつる、昨日の目をながめよ。

運命のをかしくも織りなしてゆく

縷れの青ざめた昨日の目をながめよ。

「昨日」はわたしを捉へた。「昨日」はわたしを苛んだ。

「昨日」はわたしを蹂躪つた。



わたしは力ない腕をふるつて  
 むらがる悪鬼と争闘した。  
 わたしは湧きおこる力を豫想して  
 「昨日」の扉を押しやつた。  
 わたしは不可抗な「時」を友にして  
 いま、「今日」の扉をたたく。

「今日」はわたしにとつて永遠である。  
 「今日」はわたしの慕はしい恋人、  
 「今日」はわたしの愛しい妻、さうして  
 「今日」はわたしの力の源である神、  
 あゝ、その祭壇には熾んな情慾がもえたち  
 焔はあらゆる供物を生々の色に彩る。

「今日」は來らんとする翼をとらへ、  
 「今日」は遠き未來を打ちこぼつ。  
 わたしの禮讚はわが皮膚の細胞に  
 花と亂れる情慾の讚歌、  
 あゝ、偉大な本然ほんねんに根ざす力の動きに  
 わたしは車輪の一片となつて  
 その壯大な堂宇をかけめぐる。

わたしは「昨日」を葬る、やさしい言葉もかけず。  
 わたしは合掌する、わたしの燃え立つ魂に。  
 わたしは瞑黙する、静かな夜にもきこえる鼓動に。  
 わたしは火をかゝげる、わたしの心の隅々を明るくするため。  
 わたしは歌ふ、大聲を張りあげてわが心の動くがまゝを言葉と響にして。



あゝ過ぎゆくもの的一切、わが前を消えさるもの一切、  
われはそのために嘆かず、わが愛撫の心を生き動くものの上にとさし向ける。  
わたしは一切の死滅を幻と信じて  
うつりゆく時の胎内にわが生をさゝげる。

満腹

あらい蹄で土を蹴るPAIN  
野蠻な笛が空にうめく。  
おゝ、ひたむきに走れ、  
おまへの苦痛に渦を巻いて  
ひたむきに走れ。  
おまへは打ち克つもの、  
悔いるな、嘆くな、



おまへは盗みとるもの、  
幸福のためには  
地上を血で洗ふもの。  
さあ、刈りとられた草原の上に、  
血まみれの食卓がある。  
その御馳走は「苦惱」  
食へ、掴め、満腹しろ、  
苦しい味ひが魂に薬だ。  
苦惱を食へ、食つて終へ、さうして肥れ。  
空には野蠻な笛がひびく。  
おまへの樂欲を煽りたくすために。  
おまへを奮ひ立たすために。  
おまへを打ち克たすために。

## 解 脱

われらの周圍を  
われらの中に見よう。  
そは共々に呼吸する存在、  
同じ「時」の寢床にねむりまた起きて  
再びおなじ朝をむかへる二人。  
あゝわれらの和解の言葉は分有、



二つの心をひとつにもつこと。  
 ともどもに一つの心を分けあふこと。  
 されば果しない争ひの饒舌を  
 たゞ沈黙のなかに流して終はう。

われらの土のうへには  
 ときじくの木の実香はしく匂ひをはなつ。  
 あゝ、飛ばんとする心よ、先づ土に歸れ、  
 蒼空は大なる環をなして  
 地上に折れ込む。

焔はゆるやかに世界をあたくめ、  
 永遠の太陽はおまへの血のなかにも住む。  
 われ自らを掘りさげよ、泉を見んためには。  
 われ自らを碎けよ、愛を知らむためには。

われ自らの分子に、わが切ない言葉をかけよ。

苦惱にゆだねよ——苦惱を呑むためには。  
 「生」は赤らむ遊泳者の胸の如く泡沫しづみに濡れて  
 恐ろしき波のうねりのなかに漂ふ。  
 あゝ泳げよ、そのうねりのまゝに。  
 われらの地上の黎明あけぼのは  
 われらが悩む沈黙のなかに生れる！

あゝ、われは力をこめて壓搾する暗き葡萄の房  
 そのほじけ上る粒の滴りに新鮮な  
 生の酒を味はう。  
 われらの縛めをほどかむものは。  
 至上の幸福に酔はむものは。



## 死

「死」がこゝにゐたなら  
しつかりと「生」を握らう——  
おまへにとられないために。

「死」がむかうにゐたなら  
ぢつとして話をしてみよう——  
鏡にうつる姿と話をするやうに。

「死」がしづかにやつて來たら、  
快く眠らう、たつたひとりで——  
ちがった朝をむかへるために。



和 絃

わたしはあたへられた「時」のなかに  
ひとりで歩む。  
わたしはあたへられた楽器のなかで  
出来るだけの音色を出す。  
わたしの調べはわたしの心を怡ばすため、  
そして、わたしの「生」をかなたへ、かなたへと進ますため、  
また二つとない刹那を

幸福に膨らみますため、  
何の智巧もない手をもつて  
たゞ夢みるまゝに掻き鳴らす。  
わたしの生の和絃はたゞ  
わたしの熱によつて高まる！  
悩みのなかに呻くゼロの重い嵐も、  
低い胡弓の咽び音も、  
たゞ終極の調和に向つての不協和音、  
悲しい律の亂れである。

わたしは素手をもつて  
嵐のなかに飛び込む、  
わたしは私にあたへられた「時」を



わたしの熱情で酔はさう。

わたしはさびしい運命に酒を飲まし、

真赤な衣ものを着せて夕日の戸口に立たす。

夜はたゞ休息のため、

死は生を楽しくするため、

その不斷の進展を晝と闇とにわかす。

あゝ、わたしの上にも眠りはあれ、休みはあれ、死はあれ、

しづかな花をもつて飾る墓はあれ、

碑銘の悲しい詩もあれ、

たゞ、わたしは病み蒼ざめた「疲勞」を眠らし、

この生の曙を黄金色に彩らう。

わたしの心の中に眠るものは

みな、その生きた口をひらいて歌ふ時がくる！

疲れぬ魂の幸を歌ふ日がくる！

木の葉の微風にそよめく如く

五月の海の明るくほゝ笑むごとく——

わたしの微笑をひとびとの口もとへおくる日がくる！

矛盾は一つの偶然、

宇宙の断片としての偶然、やがては

巨大な調和の堅琴にはせ参じて

その夢をうち響かす一つの律。

善も悪も愛も憎みも、

われ自らのうちに闘ふ分子——







その教へをこそ忘れるな。  
そしていつも豊醇な生の<sup>いのち</sup>香りを  
熱い唇に貪り食ふことを忘れるな。  
鳴りひびく嵐の和絃のたゞ中に。――

春の頌

I 序曲

風はさみしき土から生れ  
暗い道をとほる、

風は孤<sup>ひとり</sup>りの心に生れ  
ひとりの姿でゆく。



風は草の實のひとつを姪ませ  
たくさんな花をさかす。

風はしづかな足どりでゆき過ぎ  
賑やかな舞踏をする。

風は見えぬ花のひとつにも口ふれ、  
顫へる蔓のひとつとも握手する。

風はうたひつれ言葉を交はす、  
おのが歌と世界を調子に合はす。

風はひどきわたり、ひどきわたり、曙へと、

朝へと、正午へとすゝみゆく。



II 風 景

おし静まつた土から  
ひびきわたる芽の音！  
石竹色の空。

緑の柔軟な皮膚  
赤らんだ乳房の山。  
女性のしなやかさに枝はのび、草はのびる、

そして、その下に  
男の腕がある——  
強健な、太い男の腕、  
力一ぱいに土をさへるテシウスの腕。

虹とかどやく空気、  
玻璃盤の周囲のきらめき、  
太陽は嬰兒あかんぼのやうに笑ふ、歌ふ、  
そして、  
萬物を太鼓のやうにたたく。  
千差萬別の感覚で、  
一つに聚る韻律で、



おし黙つた静かな土から  
ひびき割れる芽の音！

春はちつと怵へた胸で  
可笑しさうに笑ふ。

### III 夜の歌

夜はもの静かに坐る、夜は名も知らぬ客人の姿をしてわたしのかたへに坐る、しかしその手は温い。

窓をとざした外をとりまく五月、甘美の季節、あゝ遠くで山査子の散る匂ひがする。鬱金香の幽かにひらく音がする。たくさんの處女が心で愛人を夢みる匂ひがする。夜は見知らぬ客人のやうに傍にすわる。しかしその手は温い。



「おゝ、見知らぬ客人よ」とわたしはひそかに呼ぶ。夜はしづかな掌をわたしの胸のなかでひらく。すべてが沈黙のなかに吸ひ込まれた空虚な世界、そのなかでわたしの心は嬰兒のやうに眼をさます。わたしは音もない沈黙の手に自分をゆだねる、母にゆだねる嬰兒のやうに。

夜はもの靜かに坐る。しかしその手は温い。あゝ、いつのまにかわたしはその客人と話をし  
てゐた。わたしはやがてその手をとつて外の祕密をきかうとした。窓の外に五月は女の髪  
の毛のやうに匂はしい。

あゝ、わたしは切なくその匂ひをかぐ、わたしは春情づいた子供のやうにしきりに胸をさは  
がせてあこがれる。憧憬の心の祕密をさぐらうと「夜」に訊く。しかし夜は黙つて答へな  
らう。

おゝ、五月、五月、甘美の季節、しなやかな裸體の線の誘惑に吾をおぼらす五月、わが息を  
はずませ、わが思ひを切なくする五月、春情をそゝらせる五月、樹皮の液汁を滴らす五月、  
すべてのものの胎である懐妊の五月、微風の五月、溶けてくづれる微笑の五月、女の五  
月、男の五月、——あゝその祕密を夜は語らない五月、しかしわたしはたゞ切なく酔は  
うとする。……



IV 寂しい焦燥

窓の外に五月がきてゐる、  
青い着ものを着て。……  
しかしわたしの窓は今夜は淋しい、  
花一つおいてない、  
青い窓掛<sup>まどがけ</sup>がかたく垂れて  
わたしの息をとちこめる。

窓のそとに五月がきてゐる、  
青い着ものをきて。……  
しかしわたしの手はその窓をひきあけて  
彼の女<sup>かみよ</sup>を呼びこむためには  
あまりに節<sup>せち</sup>が固すぎる、  
あゝ、暗い今夜、かすかな雨がふる……

窓のそとには、五月が  
青い着ものをきて待つてゐる。



V 春の愛

春はしんじゆんと滲みとほる、  
やはらかな雨は土をなだめる、  
心の甘さで男をひきしめる女のやうに。

春は女の愛、男の愛、またすべての愛、  
春はすべてを抱擁し、  
そのからみつく腕かひなのなかに

不可思議な種子たねをたくさん播く。

おゝ、ゆるやかでしなやかな春の掌たなをこ、  
そこからこぼれ落ちる「微笑」の種子！ 「愛」の種子たね！  
かすかな護謨の弾力をもつて  
人をそゝる「性」の種子たね！  
おゝ、伸び伸びと伸びよ、弱くとも、  
なつかしく豊かな情慾の波に——  
いたいけな汝の心よ、  
春はちひसान草の芽にすら  
ほこらしい生活をあたへる！



VI かるい五月

五月、五月、五月、  
あたりは花園のやうに明るく  
一めんの匂ひに充ちてゐる。  
わたしをとりまくこの空間を  
どこまでも、どこまでも泳いでゆきたいやうな  
ほんとは爽やかでかるい空気が、  
その空気の手觸りは

わたしをまつたくの動物にかへらし、  
ひとつびとつ官能に  
新しい快感をあたへる。

風は快い微笑をうちまけて、  
花圃の草花をかたつばしから  
本の頁をめくるやうにひらかす——  
鬱金香、罌粟、ひなげし、あねもおん、  
すこし媚をおくるやうに、ときをりは  
處女の脛をもるんりよなく露はにする  
そよかぜ、そよかぜ、素足の微風、  
この青空のまつ下で  
五月の饗宴になくてはならない



若ものの心には戀の酒をつぐ。

あゝ五月、五月、五月、

なんと繰り返してもいゝその歌を

また今年も新しく歌ふがいゝ、

にぎつて放さない握手を

しつかりとお互の胸におくがいゝ。

影までも匂はしく香る薄暮たそがれに

すこしの悔もないまでに。

## VII 夜 曲

春の夜よるは鋭い汽車の笛さへ

圓みを帯びてきこえる。

どことも知れぬちひさな囁きが

あたりの甘い霧のなかゝらおとづれ、

睡りに落ちた小鳥の羽は搏はたきさへ

あきらかにきゝとれる——公園の夜道、

寄り添つた二つの影が



世にまたとない親しさと美しさで  
しづかにわたしの前をとほる。

わたしは二人の甘い言葉を  
その躍る胸の鼓動を、熱い手の脈膊を  
しつかりときいてゐた。

悩みも、よろこびも、

溶け合つた夢の路にはたゞひとつ、  
そのしづかな幸福の小徑を  
わたしもいくたびか歩いた。

夜の幸ひよ、春の歡びよ、  
消えざる瞬間を一あし、一あし、

おまへの息で匂はしくするため、  
おまへの陶醉で桃色に染めるため、  
あゝ、この夜霧の  
深い朧ろな魅はしのなかに  
なにもかも忘れて歩め。  
花の音もなくひらくやうに  
ともどもの胸の幸福をそのまま  
しつかりと抱くがいゝ。

春の夜は鋭い汽車の笛さへ  
圓みをおびてきこえる。……



## VIII 生は春にあり

湧きいでる、湧きいでる、湧きいでるものこそ不可思議、  
風はにほひなきところにも匂ひをおくり、

地のあらゆる力をおのづからに燃えたくす。

おゝ生こそ不可思議、いま在るものこそ不可思議、生れいづるものこそ不可思議！  
河の岸邊に春はその足どりを亂して

快い素足に青草のはつ／＼とした根元を踏む。

蛙は起きあがり、蝸牛は角をのし、ひとしく大きな空の下に呼吸する、

湧きいでる、湧きいでる、湧きいでるものこそ不可思議。

あゝ、わたしはそのむかし情慾の嵐に

こともなく齎されたひとつの草の種子——

あゝ、そのこともない戯れを祝福しよう、日の下で

そのおのづからなる嵐に呼吸づく

ひとつの力を讚美しよう。

湧きいでる、湧きいでる、湧きいでるものこそ不可思議。

をりをりにはためく風の戦ぎに光はみだれ、

燃え立つ陽炎のなかにふともさし入る草の陰影——

おゝ、たとへ、そのごとく死はおとづれ來るとも恐れるな、

おまへをやさしくなだめる微風のなかにあつて

おまへの呼吸を波うたせ、お前の唇を燃えたくせよ。

湧きいでる、湧きいでる、湧きいでるものこそ不可思議。



あゝ生いぢこそまことの不可思議、知りえぬものの力、  
 春の川の岸邊に生ひたつ草の實の如く  
 少くも膨れあがつた魂の幸ひよ、  
 わたしはあらゆる陰影かげを追ひやる、熱に火照ほる手をもつて、  
 あゝ、わたしは心の中の汚染しみのやうな黒點をこの光のなかに消滅さす。

## IX 戀

わたしは孤獨のなかにゐて、  
 孤獨の壁にうつるおまへを見てゐる、  
 わたしの幸福は爪を立てよ  
 その壁を這ひのぼる。——たしかな「おまへ」を  
 わたしの心の中に所有するため。

おゝ戀よ——



もう疑ひぶかい心を解いて  
 たゞおまへの胸の鼓動をきいてゐよう。  
 わたしの脈とおまへの脈とが  
 ちやうどよい調子をうつのを……  
 それから、おまへの眼が私のさびしい顔をうつして  
 濕んだなかに湖のやうに輝くのを。

おゝ戀よ——

わたしは淋しいひとりの世界に  
 おまへを見つけた。  
 けれどもおまへの姿のうらには  
 自分の幸福を裏切る「憎み」がすんで、

たえず私をおびやかしてゐたのだ。  
 おまへを愛すれば愛するほど、  
 おまへを殺す刃<sup>は</sup>ものと、自分を傷ける「恥辱」とが、いつも苦しめた。

おゝ戀よ——

しかしおまへとわたしとを一つの焰に燃えたゝす  
 よい瞬間が二人にきたのだ。  
 二人は苦しみのなかから手をのばして  
 雑草のなかから莖をさしのべる薊<sup>あざみ</sup>のやうに  
 燃え切つた力で新しい世界に  
 おのおのの芽をさし出した。



おゝ戀よ——

日光にまみれた輝かしいからだに體で  
強い接吻をしつかりした。

ともどもの生を裏切ると思つた慾望が  
ともどもの胸の中に生きた。

孤獨のなかに爪をたてゝ

なほも敏感に觸角をはたらかす、

戀よ——

熾んな日光の陶醉で、

なほも醗酵する生よ、——不可思議の……

おゝ戀よ——

## X 白晝の哄笑

大氣は玲瓏とした室へやをつくり、

太陽はすべてを寶玉にする。

空中に光る微分子、

あゝ、塵さへも黄金こがねのごとくに輝いてゐる、

こゝではすべてが神のもの、

すべてが朗らかな呼吸のなか、

おまへの心もこの大氣のなかで



光りの一片と化しされよ。

光る、光る、光る、あらゆるものの本然<sup>ほんぜん</sup>、心の臓<sup>しん</sup>が、血管<sup>けっかん</sup>が、障礙<sup>しょうがい</sup>を破つて  
葉脈の日光に露はなごとくに

光る、光る、光る、裸體の跳躍、

微笑と、勇ましい心と、自然な歩み——

澁面<sup>しぶめん</sup>を去れよ、

眞面目<sup>まじめ</sup>くさい昂奮<sup>きやうふん</sup>を去れよ、

それらは光のなかであまりに可笑しく見え、あまりにつけたりだ！

むしろ笑へ、大きな聲で、怒鳴れ！

おまへの怒鳴る彼處<sup>かしこ</sup>に

神もまた笑ふ。

## 日本の畫廓

### I 雪 舟

たゞ見るは煙る雲と、走り過ぎる水と、

一沫の刷毛に描き出された山、動かぬ山、

宛ら宇宙の意志が齎したかのやうに

確かな線條は自然を心のまゝに約説する、

素朴な墨汁の匂ひ、紙の上の不可思議な實在。



あゝ意力の畫家よ、精靈の畫家よ、  
君の前に自然は夢のごとくに解き放たれて  
また再び新たな自然を形ちづくる、  
緑の樹立も朱塗しゆぬりの樓門もたゞ薄墨うすずみの一刷毛、  
さうして實在の祕義に通じたやうな足どりで  
杖をついた高僧は棧道をゆく。

めづらかな沈香かろうが肉體を捉へるやうに  
わたしは陶酔の世界に醒めてゐる、  
澄みわたる月の色の恍惚で。——  
あゝ鳴り響く力は音も出さず靜かに

暗い線と明るい紙のうへから  
わたしを確かな世界へと導ひき入れる。



II 若 冲

蛙がゐる、蝸牛かたつじりがゐる、蟋蟀がゐる、甲蟲かみとじしがゐる、  
大きな蓮の花は夢から覺めた女のやうに  
その紅らんだ肉體を水から浮き出して  
濃い緑青でつぶされた葉のうへに  
なやましげに莖をさしのべる……  
下には蛙がゐる、蝸牛がゐる、また名も知れぬ魚ういかながゐる、水すましがゐる、  
そしてすべてが平和だ、圓滿だ、平等無差別の世界、

みんなおのおのが生きて、動いて、怡たのしんでゐる。  
なんといふ謙讓で忠實ちゅうじつやかな靈たましひであらう、  
なんといふ好ましい愛と深い觀察とで  
この地上の蠢めく小さな存在にも  
そのあふれる心を傾けつくしたことであらうか、  
あゝ君のまへでは名も知れぬ蟲も生きてゐる、  
はじめて自分の權利をみとめられたやうに  
聲を立てゝ動いてゐる、  
そしてひとつひとつの形はひとつひとつの色をもつて  
幸福な全宇宙を組立てる  
大きな調和の裝飾畫をこしらへる。



### III 春 信

形態の畫家稀に見る整正と調和の  
音樂のごとくに流れ出た女の四肢、  
靜かな花のごとく、白い彫像の浮き出たごとく、  
豊かな圓みは快い線條に限られて  
自然な靜謐と溫味あたたかみとを加へる、  
單音の線、さうしてあらゆる幻を閉ぢこめた  
限らない調和の線、綜合の線、夢の線、

女は心のまゝの情思と淫蕩を  
何のこだわりもない世界に投げ出して  
その白い肉體を戀人によせかける、  
夢の線、美しい形態かたちを創り出す線、  
さうして、そとでは五月の宵の靜かな雨が  
あらゆる人情の甘さを知らすやうに  
薄青い戀の世界にふりかゝる。

春信、わが憧憬の畫家、春信、  
線條の畫家、形態の畫家、音樂の畫家、  
さうして靜かな世界にあらゆる幻を閉ぢこめて  
思ふがまゝの夢に遊ばす詩人の畫家、  
春信、春信、春信。



IV 光 琳

金泥の土に豊かな春を思はず  
紅梅の大輪、枝は一つの拍子の如く、  
自然に波うつてそのまゝの心を傳へる、  
どこまでも限りなく流れた色彩の天地、  
ときめく胸の鼓動のやうに、  
湧き出る水はゆるやかに流れて  
銀泥の波紋を惹がく、かつら傍では

紫の菖蒲ははつはつと呼吸をして  
その匂におやかな花と葉をさし伸べる。

花の畫家、樹木の畫家、それらの精靈を盗んで  
大きな曲調をくみ立てる作曲家、  
限りない色彩の放蕩に寒い心を窒息さし、  
自然の深さと飽くない悦びを大どかに歌ふ、  
光琳——生のよろこびの歌ひ手。



V 歌 麿

なんといふ嬌態、なんといふ淫蕩、  
なんといふ美への誘惑、なんといふ憎らしい豊満な肉體、  
歌麿の女は地上の罪惡を  
みんな神のものにする、自由な美の世界におく。  
遊樂が世界の全部、快い淫蕩の白い肌、  
黒髪と雛罌粟の苔ほどの唇と、青い星の眸と、  
あゝその眼は飽くない享樂に絶えず夢み、

果ては臉まぶたに悲しみの隈どりさへ加はつて  
堪へられぬ愉悅に睡つてゐる。  
しなだれかゝる肉體は絶えず戀の思に燃えて  
紅らんだ牡丹の花のやうに  
男の膝の上にくづれかゝる、  
男は優しい瞳をなげて女の悲思おもひのすべてを  
そのなよやかな身體の中から掬みとる、  
快樂に痺れるやうなその手足。  
あゝ燃えたつ戀愛と生の畫家。  
女の畫家、あらゆる女の神祕をその肉體からとり出して  
音樂のごとくに表はした畫家、「性」の畫家、  
歌麿の女は惡魔のやうな媚をもつて  
靈たましひを肉の前にて獻さけり泣かす。



## VI 鳥羽僧正

これは高山寺の野狐のりつねどの  
ようこそござつた、この月の夜に  
芒のかけからひよいと公達きんたちに化けた  
狩衣かりぎぬに烏帽子姿もよく似合ひまする。  
だが、その後ろの尻尾が  
そなたを慕ふ姫君に観破されたら  
何となさります……

これは世にも名高い戯畫、鳥獸繪卷、  
これは世にも稀なお伽繪草紙、  
だが、その軽い毛筆のせゝら笑ひは  
いまの世のわたしたちにも  
めづらかな怡さそびを誘ひます。

世界はまこと永遠の悲喜劇、  
涙のピエロオが月の夜に吹き鳴らす笛の音、  
その道化芝居のなくさをりを  
いつまで立つても繰り返かへす人間の馬鹿。

漫畫家鳥羽僧正は  
その愚かな靈たましひを心ゆくまで



涙をもつて歌ひなされた詩人、  
ユモレスクの小説作者。

VII 山 樂

たゞ熱情のみ世を統しめす、  
たゞ意力のみ世を蓋ふ、  
絶世の巨人わが豊太閤よ。力と華やぐ裝飾の桃山よ、  
かつてなき偉大なる時代よ。

夢は曉には消え去るもの、  
花は土に落ちて朽ちゆくもの、



されどその消え去る悲しみをば  
 徒らに嘆くこそ愚、かの教、價なき理、  
 ひとと夢を知りて夢に生くることこそいのち、  
 波うつて絶えざるその胸の鼓動を  
 刹那に刻みつゝ永遠に渡すものこそ巨人、  
 おゝ、壯麗の意圖の時代、豪奢の桃山よ、  
 わたしはおまへの剝落した畫廊の壁に、  
 その匂ひ高き英雄の夢を見る。

あゝ恵まれたる畫家の心——豊麗の色彩、  
 山樂の金の屏風は朽ちはてた色のなかから、  
 今も生いのちに充ちて響き渡る  
 英雄の心をわたしにあたへる。

## VIII 廣 重

好ましい版畫、  
 精緻で綺麗な錦繪、  
 雨に煙つた日本の松の美しさ、  
 緑の芝山の向うに  
 驚くばかりの紺青の海、  
 薄墨に曇る茅葺屋根、たくさんな白帆、  
 そして曙の黄金にかどやく



すつも氣高し富士山、  
COARMANT JAPONI

不斷に恵まれた四季の自然の怡び、  
廣重はいつも情趣のカメラに  
生々しく自然を組立てる。

自在な變化、すこしも淀みない觀察、  
あらゆる複雑を統一する非凡の構圖。

幾何學と遠近法、和蘭の浮繪、

ウキスラアの心にマネの心に、

ゴンクウルに、ゾラに

驚きの眼を見晴らした印象派畫家、

——わたしにはたゞ素直に見える、

怡びに見える、さうして日本の自然の  
正しい姿を見た最初の畫家に。——



かなたの空



秋

秋は昔の戀人のやうに  
忘れた心になつかしく寄つてくる、  
今は忘れはてた面<sup>おもて</sup>、  
その面變つた瞳に、  
薄い夕月がさす、

秋は芙蓉色の夢に、

く、り、い、むの溶けた空に、  
悲しい木立をそよがせ、  
さむしい笛をおくる。

忘れはてた昔を今、懐しい君の瞳<sup>ひとみ</sup>にみる、  
繊<sup>ほそ</sup>やかな手の固くなつた節<sup>ふしぐ</sup>々を、  
凍つた乳のやうな瞳を、  
さうして、靜かに追憶に燃えるその光りを。

秋は蒼さめてゆく夕月のかげに、  
楽しい滅びを夢みる。



## 十月の雨

十月の雨が悲しくふる、  
桐の枯葉に、褪せてゆく緑の草に、  
だありあのふかい蔭の夢から、  
十月の雨がふる。

庭の木立を騒がしてゆく落葉の雨、  
追憶と淋しい安逸にふりそぐ雨、

ころゝほるむの醒めがたい夢から、  
塚穴へ陥る雨……

すべての病めるものは、  
安らかな死に就く——  
悲しい、孤りの、静かな、  
心騒ぎの、そのあとの、雨、十月の雨。



たそがれ

美しい薄暮のうちに、  
光りは死ぬ、  
噪がしい路の上に、  
影は消える。

軽い夕とゞろきが、  
地の老い疲れた夢から、

微かな風を誘ふとき、  
路傍の並樹は低く嘆く。

夜を迎へた街の灯よ、  
金と死との暗よ、  
はるかな風のかなたに、  
美しい光りは死ぬ。



期 待

遠い雲の燃える山のはてを  
輝かしく見せる樹の葉よ、  
緑にちる光りのあとを、  
黄金色のよろこばしさを、  
いつも暗い椎の蔭から見てはをれど……

薄暮は小徑に黙れる百合よりも悲しく、

荆棘よりも痛ましく、  
わが光を影にみちびく。



## 暮春の幻想曲

水ぎはに映る月の葉かげの滴りが、  
夕闇に匂ひちる李すももの花の静かさに影をしく。

四月の暮れは秋よりもさみしく、  
池のおもてに落ちる光りは絶えだえに、  
幻の靄の中より搔いさぐる優しき心。

李の花は散りしきり、濕ぬふ銀ぎんの白楊の、  
木暗こぐらに絹の薄色の「春」は咽び入る、  
たよる心をすげなくもふりすてられて、  
たゞひとり記憶ぞきく、  
なにもものか一つの、死にゆく夢の囁きを。



蟾 蜍

青い歌のながれる、

涼しい晩、

竈に洩れる月が、

水草の溜りにもちらつく。

蔭の水がちよろ／＼と、

蓼の花にかすれて、

眠入つた銀の夜に咽ぶとき、  
風呂場の黒い板戸から、  
水汲場の桶のふちへ、  
ひとり歩くのは誰だらう。

心ゆくまで顫へる、  
悲しい秋のふるうとか、  
幼い節でいまもきこえる、  
子守唄か、それとも……  
靈に沁みるまことの、  
むかしに返つた、貧しい心。

おまへはくく、くくと、



面白く今夜も歌つてゐる。

涙がながれるときにも、

さうやつて！

さうやつていつまでも、

歌つてゐるがいよ。

痛ましい生のかげから、わたしも、

低い貧しい嘆を、

おまへのやうに歌つてゐたなら。

風にふかれて雲は、

良いお月夜をかくします、

憂ひを曳く光りのかげに、

咽びいる水のふちに、

道化顔の優しい歌の主——おさらば、

銀の蓼の花のゆれる小徑を、

私の小徑を、

かへりませう。



夜 樂

緑玉キョウゴクの空のふかさが  
しづかな眠りの心に沁みいるとき、  
森の奥にはかるい風のさゝやき、  
泉には月の光りが冴え、  
河骨は煌めく波のかけに  
美しい夜よるの瞳を眺めてゐる。

心はつねに影を慕ひ、  
心はつねに安息を慕ふ。  
軟かな笛のひびきが村から洩れ、  
並木に滴りおちる青あざが、  
さゝやかな歌を織る。

絹の空の沈黙に、  
ふるへる金かねの針、  
泉におちる月と風と、  
さわやかな黒の瞳の夏は  
魚のやうに楽しく  
泳ぎ廻つてゐる。



女の髪の毛の油の

ひとりゐて匂ひを嗅ぐがごとく、  
夏はかどやかかしい上衣の  
裏の祕密を、たのしい戯れを、  
夜に投げ出してゐる。

芽

芽を愛せよ、  
出できたる芽を愛せよ。

土の中ぶちにありて日を見ざる芽を愛せよ、  
言ふ言葉を持たざれど、  
激しい思ひに渴き、生きてゐる、  
生きた、生きようとする若い芽を愛せよ。



冬は老いてはをれど日光は死なず、  
凍つた丘にも青い草は萌えいでる、  
濁り淀んだ沼の水もぬるめば  
朽葉の層もいかで重かるべき、  
緑にかどやく空に眞珠と光る  
たゞ一つの生命は伸びてゆく。

その芽を愛せよ。

## 素 畫

畫家よ、木炭の走るがまゝに君の生命を、  
こゝろやすく紙の上につす、畫家よ、  
モデルの静かな皮膚が呼吸する光りを、  
ぢつと瞞めながら、君の眼は「發見」に輝いてゐる。  
幻に浮きいでる肉體のおとなしさは  
畫の泉よりも美しく君の内心を嚙む。  
君は「不可思議」と「不能」とのために迷はず、



瞳はたゞ悦びにのみ燃えてゐる。

124

木炭の走るがまゝに君の生命を、  
こゝろやすく紙の上にうつす畫家よ、  
墨繪のなつかしい陰影に浮く生の寂しみは、  
かるく拭ふ君のパン屑よりも小さい。

美と、實在のよろこびと、感覺の幻像とを尊べ、  
いま消える影をとどめよ、  
光りの夢にうく私の生の素畫は、  
疲れた線と影とに消えてゆく。

## 風景

悲しい額縁の中に  
夕暮の繪は顛へてゐる、  
灯りのつかぬ街からさす光りに、  
柳の揺れる河岸の水の面に、  
たゆたふ影のやう。

海色の空が暮れ、

125



雪は凍えた樹の影を日没にうつす。  
 屋根の上の烏が喰物をもとめて、  
 その広い翼が窓から影を落すとき……

髪の匂ひのまだ去らぬ床のやうに、  
 唇にのこる息のまだなつかしい朝のやうに、  
 その繪は私の心を影に惱まし、  
 細い金のふるへに甘やかな悲哀を誘ふ——

おもひいでよ、おもひいでよ、と云ふやうに。

## 静物

A. S. A.

卓ダイブの上に流れこむ朝のひかり、  
 緑の廣葉を洩れる水晶の外光は、  
 雪崩よりも白い卓布の上に輝く、  
 新しい畑の夏蜜柑と、  
 碧玉サライルよりも青い野の葡萄とに隣りてゐる。



静物のをかしさよ、  
光りの不思議な戯れに、  
畫家の心を狂はす静物の  
をかしさよ。

か、ど、み、あ、む、く、れ、え、る、じ、よ、お、ぬ、し、と、ろ、ん、  
海色のこぼると、晴れた日の泉のえめらうど、  
あの優しい唇を思はず少量の石竹色と、  
朱欒サボテンよりも軟かな伊太利亞の卵黄色——  
すべて繪の具は調へられてある、そこで、  
戀をする「ときめき」のやうに私は、  
驚かれる心の嬉しさを  
畫布にすりつける！

静物の、夢の、光りの、をかしさよ。

静物は生きてゐる、  
夫れはもでの美しい線のやうに、  
兩の股を張らして、漲る暖い血をその下に通はせた  
「生命」をもつてゐる。  
乳よりも軟かに溶ける光りの戯れに、  
もう皮膚を厭といふほど肉感に踊らした、  
生々しさ——  
静物は「生の歡喜」と「生の愛好心」とを  
心づよく私にあたへる。

午前は美しく若々しい、



廣葉を洩れる緑の寶石——

いくつにも見える太陽、

いま私は卓布に落ちる堇の影に、

飛び立つほどの心をし乍ら眺めてゐるのだ、

優しい色彩の王国！

匂ひのするまで迫る幻影！

おい、生のさびしみを教へる詩人は誰だ？

馬鹿もの奴！

ふれりうど

月はわが秘密の花園へも忍び込む……

葡萄色の土はもう暖かに燃え、

沈丁花のほひの漲る葉裏には、

夢の如く絹の光りが褥をしく、

春がその中でおどくと、

處女のやうに心を顫はせる。



あらゆる芽はしとやかに勢よく伸びた、  
 生命をもとめる願ひに魅力と愛とが輝く、  
 静かな夜は女の手に觸るやう、  
 魔睡と祕密の誘惑にいづこからともなく風がふく。

(いのちを愛するものよ)

誘はれてみたい願望は胸に充ちてゐる、  
 しかしわが心ももどかしさに顫へる、  
 空の快い毒素のやうな青色が、  
 わが眠りの上に滴りおちるとき。

(いのちを愛するものよ)

來るものがあるやうで音がな

軟かに飢ゑた心はしかすがにそれを覚えてゐる、  
 脈管と皮膚との上に祕密の薔薇はしきりに匂ふ、  
 手をとつて踊る心はもつてゐるのに……

(いのちを愛するものよ)



焰

A Madame X

焰はいつかは空<sup>ひな</sup>しいものです、  
紅玉の中に燃えてゐる鑛質の光りに  
織り込まれるわたしの夢——  
あなたの白い指の上に、  
不斷の歌を唱ひつゞける  
金の指環<sup>リング</sup>。

焰はいつかは消えてゆきます。  
五月の雨に濡れる薄暮<sup>かたれ</sup>どきに、  
青き葉のみ息づく惱<sup>なやま</sup>しさを見る如く、  
あなたの手に刻まれた血の烙印<sup>ちくいん</sup>も、  
いつかは消えてゆかうもの……

焰は、かくて、空<sup>ひな</sup>しさに嘆きませう、  
されどたゞそのうちの夢を見うれば  
酒瓶に湧く酒よりも新しく、  
清いその匂ひが、また生命<sup>いのち</sup>となります。



## 影の MODELÉ

痛ましい金の小鬼よ、  
 顔く腕の力に汝は何の秘密をもつてゐる？

削がれたる肩の肉に

二月の午後の日は底温く照る、

『少い影』よ、生命の不斷の悪逆、恐怖、  
 さうして絶えず襲はむとする命運の黒雲、

汝は何處へ行かんとするぞ。

白きくろすの上に白き花束をおけば、  
 その幽かなる陰の匂ひは忘れがたし、  
 わが心にたくらむ鬱憂の焔と性慾と、  
 『少き影』に被ひかゝる生命の Modelé  
 その歩みの上に落ちる闇い暗示よ。

汝は穴ぐらの中から絶えざる歌を、

金の小鬼よ、わが心に潜む陰影に投げてゐる。

(白樺主催展覽會にロダン作「ある少き影」をみて)



### 李の花のちる頃

李の花のちる頃、わが惱みは深くなる、  
 可愛らしい氣立にわが胸を悦ばせんとはすれど、  
 悲しさはその蒼白き花の影をゆきかひ、  
 絹よりも優しき薄暮にひとり傷く。

夜がその匂はしい肌にわれをかい擁き、  
 青色の夢に床をとりまき甘やかす、

されど小さい「吾」はなほ孤りの蔭に、  
 低い哀訴を恣にし……

銀の金具の暗に鳴るごとく、  
 思ひはその若さに傷いてゐる、  
 戀人よ、たゞひとりの戀人よ君はなぜに、  
 吹き過ぐる微風にのみ杳かなる歌をおくる？

静かなる心にねむらすものは！  
 歎歎ぐる心をなだめるものは、引き立たすものは！  
 わが胸より今宵悲しく「春」は忍び足してすぎる、  
 素足に——わが涙を知らざるものの如く。



## 心

命にかへても私はおまへを愛したい、いつも  
忘れずにかへる素直な「心」、呼吸をはづませて、  
わたしの膝に泣きくづれる小猫の「心」を。

どうして私は狂ふのか、赤い火酒の恐怖が急に、  
縫針のやうに心臓にみちると汝を忘れるのだ、  
蒼ざめた唇に優しい言葉をもつた「心」よ。

「悲しくあれ」静かに悲しくあれ」といふ聲は、  
李の花の散る暮よりも匂はしく涙にみちて輝く。  
美しく悔の蓋に咲く心よ。

わたしは莫迦だ！ 不斷の不能の慾に手を焼いて、  
また歸つてくる弱者だ、星をめぐけてゆくには餘りに賢い痴者だ、  
血に濡れる入目を眺むるには！

静かにほゝむ女——私はおまへを愛する。  
どれ、その優しい涙に濡れた臉に熱い接吻をしよう、  
汚れたものはひとつもない、その泣きくづれた貧しい「心」に。



## 海邊消息

A Mon petit frère K.

海が鳴る、海が鳴る、快い砂を撃つ地響……

弟よ、今日も私は丘にきてゐる、青い三葉草の草地の、  
 ところどころ赭土を露出したあひ間に玫瑰が悲んでゐる、  
 濃い夏の陰影がものの姿を明劃とかぎり  
 太陽は岬のでつかい岩の頭を照りつける。

弟よ、私は今日も海景を描いてゐる——

汝の可愛がつてた小犬の JACK はもう居ない。

あのペンキ塗の箱は雞小屋となつて、

白いチャボが今もそこから出てきた。

果樹園に夏蜜柑が光り、砂が光る、焼けた小石、

松脂の匂ひ、そして強い緑の旋律——海が鳴る……

私はいま海岸の快い弓形の CURVE を

描きつゞける、そして水に戯れてる小兒の群を、

弟よ、私は海にきていつも心からの無邪氣と自然に  
 かへることが出来る。

剛健な海士の子は素裸で黒い肌を光らし、  
 親に睦しむやうに海と戯れてゐる、弟よ、



吾々の愛はあまりに傷き、文明は餘りに病んでゐる。  
 白晝は輝いて、強壯で、彼らは雑草のやうにのびてゐる、  
 そして獸のやうな自由に――

弟よ、私は晝布の上に乾いてゆく色を眺め乍ら、  
 價の高い勞作がどれほどの「自然」をも出しえないことを知るのだ、  
 獸のやうな自由に、むしろ海士となつて、  
 あの素直な大膽を、無邪氣を學びたいものだ、  
 心をあげて弟よ、吾々の愛も……

青いクロバアの草地に日傘の白が揺めき、  
 涼しい七月の風は松の蔭に吹き込む。  
 夕月の出るところ、梟の鳴くころ、夕餉の卓の上で

どんなに汝を思ひだすだらう、慕はしい弟よ。

海が鳴る、海が鳴る、快い砂を撃つ地響……



## 鏡

朝は忘れぬ言葉のやうに身にひびく、  
香油を散らす髪の毛、桃色に透く肌に薫り、  
背景の海は花のひらくやうに  
床の濡りを匂はせて、風が吹き入る。

私はいつもそなたの友だちで、  
その優しさにいつもそなたを羨かし、

前髪をとる手になだらかな光を反射し、  
葡萄色の鬢に、唇の邊に、美しい添口をする。

水淺黄に映る面を、そなたが夕ぐれとなれば、  
また湯上りの淡紅色に、星の眸を微笑ませ、  
時とするとその素裸な股の、豊らした雪の辱に、  
妬ましいまで夜の遅さを嘆かす。

また譯もなくつまされる思ひ出の痛ましさ、  
晝のもの倦さの煙草に、情人へ書く手紙に、  
氣にかゝる面ざしをわたしに向ければ、  
しとやかな氣立にすぐ引き立てる。



嬉しい心をしておいで、いつも私には——  
涙のおもても直す工夫は知つてゐる、  
薔薇の頬と、雛罌粟の唇が燃え合ふ夜がすぎると、  
またそなたは私に疲れた髪を見せるではないか。

### あけがたの雨

F 子に

夜がこゝろなく君のおもてから、  
しづかに、その懐しい面帕エーペルを引き放してゆくと……、  
薄青い引潮ひきしほの底にのこる悲みの光りに、  
歡樂は一つびとつ追憶の棺におくられてゆく。

ひきあけの光りの青さ……  
蒼あふろさめた杏色あんぎに煙る君の頬のあたり、



玻璃を透く薔薇の匂ひに交つて、  
 いつからとなく迷つてゐた雨のおとなひ、  
 君はまだ眠つてゐる、蠟の様に青く……  
 私はその肌まつはるあらゆる悲みを、  
 總身に感じるやうにと犇とその腕を抱く  
 接吻のあとに残る口紅の冷いにほひ。

明けがたは夢の覺めぎはよりもつれなく、  
 思ひ出の痛ましさは鋭い刃の如くに喰ひ入る、  
 はや光りは充ちてくる、辛い浮世の夜明けに、  
 ひきしめる髪の如く、さても昨夜の雨の懐しさ。

## パステル

濡れた柑子が香ふ……  
 どこか月がさすやうで、  
 ほのかに明るむ葉末から、  
 青い花が散りしく。

もの音は静かに更けてゆく、  
 野兎の軟かな毛のやうに。



海は木の間から、  
銀の羽根を曳く。

闇にうち顫ふ緑の息が  
優しい夜をとりまく、  
どこか月がさすやうで  
青い花が散りしく。

きいておいで、ね、沙に、  
おとなしい波の睦言……  
まあ、おまへの髪にも露が溜つて、  
街の灯がぼんやり顔に映る。

かうやつて、いつまでも口づけて、  
黙つてお互の胸をきいてよう。  
どこか月がさすやうで、  
青い花が散りしく。



にほひ

葉かげに身を埋めて、  
薄暮たそがれの光りをきく。

くづれちるものうちに、  
「秋」はよりかかり、慕はしく。

光りの衰へるなかを、

どこからとない花のにほひ。

痛ましい偽りの言葉に、  
薔薇さくしびの心は散つた。

蒼ざめた指をひとり組んで  
私は掻い擁く——

私の心はをのゝく、ただ一つに焦がされる……  
遠い、遠いその花のにほひに。



## 秋のおもひ

季節はいつか慧しい眼をして、あらゆる生命のうへに臨んだ。篠懸の葉は古びた金をつけ、その諸手を風に舉げた隙間に、美しい「秋」は閃く。さうして人はことごとこの思ひに青空を眺める。

光りは快い微温を皮膚に齎し、心は明るさに向つて這ふ、もの狂ほしい淫蕩の「夏」の花園は自らの火に焼かれはてた、見るものがすべて今はその内心にふりむき、浮かれ歩んだ足どりを停めて、わたしの心もまた沈黙のうちに息づ

く。

心は常に願望を抱くが故に傷つく、肉體はその沈静な明るさの中に呼吸し、まだその光りの痛さを覚えるほど傷痕と疲労とに悩んでゐるではないか、翼をあげた心よ。愛の中に纖弱な手を挫かれた靈よ。汝は水に落ちた小鳥のやうに慄へてゐる。

かくて汝は「時」の魔女になほも玩ばれ、永遠のうちにその儚ない靈を刻まれる。季節はいつも衣を更へてはその悲みを新しくする。柔順にして愚かな汝の心はそこに亡びゆく汝の愛を歌ひ、堪へざる心を躍らして棺に急ぐ……しかし心よ、汝はいつもそれによつて泣いてゐる。

いま秋は優しい色の衣をつけ親しい言葉を以て汝の胸にさゝやく。それは心の



奥にそゝがれる涙である、私はあらゆるものを掻き擁く。堪へ難く、切に堪へ難く、あらゆるものをかき擁く。

一七八

秋ゆゑに……

### 雪はふりつむ

雪はふりつむ、わが心の上に、  
薄青くふるへる空の悲みの粒……  
雪はふりつむ、音もなき死の如く。

曉は蒼ざめて玻璃の窓にしのみ、  
「影」の小鬼は盗人ぬすびとのごとくに覗ふ、  
また何ものか知らずわが髪を引き裂く。



わがおもひは裸體となり、寒さに慄く、  
そのかぢけた腕をひそかに縛め、  
やつれた頬をいたく鞭つ。

すべて影の悪戯か、わづらはしい心の奥、  
われはおし伸べる腕もなし、  
雪はふりつむ、いよゝふりつむ、音もなき死の如く。

記 憶

記憶よ、汝のみはいつもひとり、  
なにゆゑに暗いかげに蹲る。  
汝の眼は慧しく輝いてはゐるが、  
汝をとりまくものは薄暮ばかり。

過ぎ去る「時」のうちに私は優しく息づく、  
私は「影」の俘虜、酔ひしれてかい抱く夢は



さもしくも狂ほしい悔となる。

月はさしのぞく、緑の梢に、

銀色の夜は木の葉をふるはし、

撒きちる星のさざめく下に、

汝は嘆く、今日もたゞひとり……

## 田舎

さびしい冬の流眇が河の面にひき、

骨だつた梢から灰血色の落日が、

野を薄ら寒く横ぎる、

尾の如くひとり暮れてゆく村、工場、人の心。

いつかわたしの眼にもすべてが親しく、

その一つびとつの色が懐かしい景色となる、



乳をもとめる嬰兒の泣聲、夕餉の卓の燈火、  
はやわびしさの中にも平和はくる。

固い土を掘りかへし耕す農人の素朴な眼……

わたしは大空の下にその地を見る、

夕暮のなつかしき調和に霞む地平に、

かへりゆく汝の姿の美しさ。

灯は輝く、聖者の眼の如く純朴の心に、――

灯は輝く、地より、窓より、冬の暮れかゝる村に。

### 月と風との對話

風

いつも旅をしてゐる、わたしの心は休まる閑もない。いつも青色の空の下に。

月

山々の木立、谷の隈からおまへに連れて影が落ちると、わたしもときめく心を  
山の上に立たす。

風

鼻が森を出た、可愛い翼に夜がくる、水松の樹がくれに、おまへとわたしとは



密と逢ふ。

月

わたしの心はそのとき顫へて、肩は惱ましくも燃え立つ。「愛するものよ」と。

風

素足で踏む軟かな青草の莖を、髪の匂ひを、おまへの空に吹きおくる、わたしが媚びの忍びごと。

月

おまへの切ないおもひをわたしはよく知つてゐる、五月の夜の息づかひ、梨と李の匂ひを。

風

わたしの歌はしのびつゝ燃えさかる、花園に胸をおさへてひとり待つ匂ひの息。

月

手をのべてわたしの肩にしつかりとむすびつけたい、おまへのおもひ、わたし

の臉は濡れてゐる。

風

軟かな世界が色を變へ、おまへは離れる、梢にうごく光の暈、あゝ夕ぐれの懐かしさ。

月

わたしは燃える、夕ごとのそれもほんの一とき、わたしは呼ぶ、追憶の國、若い生命の夢の國。

風

水松の葉なみが金を著る、おまへの肩は蒼ざめた、おまへの旅は惱ましく。

月

わたしはいつも夢を見て過ぎ去る旅に涙する、ふかい虚無の大空、悔恨の雨。

風

そしてわたしは吹きおくる、おまへの靈を蘆の根に泣く水の蔭、岸の濕地に、



あゝわたしも破れて……

月

口惜しい光りの衣、わたしのおもひが切なくなるほど痛はしい影はしく。

風

朝がくるまで熟睡してゐる無智なものの歡ばしさ、わたしはいつも旅をしてゐる。

月

もの疲れした眼をあげて夜を見まはす、おまへとわたしと、醒めてゐるのは二人ぎり。

風

水銀色の明けがたに空は傾く、星の慧しい眼づかひも、わたしの歩みも疲れはて、

月

死がよぶほどにわたしは去ぬ、なんの名残もない別れ、夜ごとの床は廣い空、

露の曙。

風

おまへは手をのべてさし招く、けれども心は休まる閑もない、いつも大きな空の下。いつもさすらふ空の下に。



## 山上の星

お星さまは遠い、まだ上にいらつしやる、  
憧れの心の切ないこと、夜露が胸に凍りつく。

だが、あすこの頂にはきつと御座るのだ、  
金のお頭ついでが俺をさし招く、どうでも行かずばなるまい。

俺の足は疲れきつた。でも心は萎えはせぬ。

俺の胸は慄へてゐる。強い花の匂ひが俺を抱きしめる。

谷から雲が湧く、一切をあげて、飛躍だぞ、俺は神になる！  
永遠と合致する俺の歡喜を見る、頂は俺をさし招く。

俺は大きく呼ばるゝけれども、訝はかへる、  
おそろしい闇の中に向つて風がひとり吠えてゐる。

一切は空ぢや、嵐に双向ふ切ない心よ、  
お星さまは遠い、遠い、まだ上にいらつしやる。



## 光りの歌

満ちてくる潮のうへに光りは歌ふ、  
すべての満ちてくる生命、  
そのうへに幸あれと。

樹の間をゆきすぎる風に光りは歌ふ、  
心おきなく嘆く涙のかけに  
わづかなる慰安なぐさめもあれと。

## 闇

懐しい闇よ、  
わたしはおまへの胎はらから出て、  
またおまへにかへる。  
匂はしい闇よ、

春の燃える土の匂ひが  
おまへの中で息をしてゐる。  
私は知ることが出来ない、けれども、



わたしは感じてゐる。

慕はしい闇よ、

わたしは臆することもなく、すつぽりと

おまへの懐ふところに入る、なだらかに身をもたせかけ、

おまへの耳語ささやきをきく、

闇よ、そのなかに暖かな枝をさしのべ、

匂ひある芽をふく。

わたしは嘯はなまれ、わたしは眼めを開く、

闇よ、おまへはあらゆる言葉である。

おまへの言葉こそまことである。

わたしはまた信じてゐる、その棺の奥に

明るい花束の輝いてゐることを。

おまへはすべてを葬り、

またおまへからすべては生れる、

ものの始め、終り、一切。

げにおまへこそ真である。



## 古い物語

むかし、あるお城に王がひとり  
ふかい思ひに沈んでをられた、  
池の水に春の花が絶間なく散るのに、  
日のくれの近づくのも忘れて  
ふかい思ひに沈んでをられた  
そこで王妃が憂はしげに「もし王様  
どうあそばしたのでムります

もう日も暮れますのに」と訊ねると  
「朕は来るものを待つのおちや」と聲低く答へられた、  
その夜、暗い嵐がきて庭もお城も  
一ときに荒野となつた、ふと、黒い翼の鳥が  
王の冷い死體の上に舞つてゐた、  
王妃は涙をながして鳥にきいた、  
「王が待たれたのはおまへか」と  
すると鳥は空へ羽搏きしながら答へた、  
「わたしが王を待つてゐたのです」と、  
ながい年月がきてそれは  
古い傳説となつた。



瞋

古き心を捨てよと  
わが詩人はうたひます、  
おもひ切られぬこしかたも薔薇も捨てよと。

凝 視

しづかな黄昏の言葉が  
きみの胸深く歌を織る、  
夢みるかげをのぼりながら  
微かに青い夜のうちに沈む。  
窓帷をそよるとばかり風が苛む、  
黄ろい蠟が素肌のうへに滴る、



よろめく焔のまゝにおびえて  
くづをれたひとつの魂……

部屋の内は暗く、さむしく、  
断れ断れにきく涕泣、熱い蠟の滴り、そのなかに、  
私はきく、薔薇とひらくきみの肉體を、  
冷やかにさし入る空の光りを。

## 哀 訴

\*

風はふか沼を吹き閉ぢ、  
わが夢は狭められゆく……  
わが手は闇に覓めをれど、  
また足音も近づき來らず。

傷つき顫ふ杏の枝の



寒き聲のみ世には充ちたり。  
肌噛みしめてわづかなる餘地の、  
緑さへ、喘ぐばかりもあらなく。

されど日は外をばめぐる、  
悲みにかゝはりもなく……

\*

妹よ、君の掌をひらけ、  
おもひふかき眸に吾を濕ほせよ、

日のあたらせざる蔭にありて、  
照りゆく彼方を見るはいかに悲しき、

もたらせよ、雛菊を、  
萎れざる春の庭より、冬の庭へと、  
よき種子をもたらせよ、  
吾らの園はあまりに淋し……

\*

北風を追ひやれ、  
はるかなる海のかなたに。  
火に燃え熾る薔薇をもて、  
われらが窓を暖めよ、  
寒き日などかくは永きぞ。

\*



その日に君のもたらせしは、  
匂ひよき髪油、また遠き島の樹立こだちの匂なり、  
船びとの唄にあはせて、  
岸に這ひのぼる笹なり。

その日に君のもたらせしは、  
肉桂のかをり、慾情をそゝる小さき寶玉、  
また冷やかなる水盤に、  
銀と瑪瑙のかゞやく静かさなり。

\*

その日に君のもたらせしは、  
玻璃くらに透きたる果物くだものなり、

赤く染みたる頬をば隠して、  
さし出したる林檎なり。

妹よ、吾は寒くまた病みて焼かれたり。  
君の言葉は花壇を過ぎ、  
光りたる衣を着て吾が前に呼ばはれど、  
あゝわれは寒きなり。  
胸は焦がされたれども、  
寒きなり。われを温めよ。

木の實の下をすぐればいかでか、  
熱せる匂ひを知らずと言ひえむ、  
手をのべて、かくも唇をさしそへて、



吾は待てども、――

風のうちに吾は死なんとす。

されど日はなほも外をばめぐる、  
悲みにかゝはりもなく……。

### 曉を見るために

曉を見るためにわたしは

山へのぼる、海のかなたから

干潮ひきしほのごとく去りゆく影のかなたから、

匂ひいでる紅寶石、

曉は裸はな胸のごとく……

われらの暗い小逕を、



われらは祝福するすべを知らない、  
しかしその道こそかの山の頂いたゞきに  
はじめての光りを受ける小逕である、  
われらは闘ふ……  
自らの愛のために。

能ふかぎり手を伸ばせよ、胸躍らせよ、  
朝風はわが歩みの下に吹き起る、  
われらの夢を疑ふなかれ、  
小石のために道を怪むなかれ、  
夜はたゞ朝のためにある。

## 幸 福

光りに向ふ木の葉とともに、  
わが心をばゆるがせよ、  
緑の途は歩みにひらかれ、  
空はたえずもわが上に輝く。

ときをりの悩みを眞實しんじつと見なせば、  
わが歩みは『幸』に反く偽りもの、



その冠を打つ腕をば、  
願くばゆるやかに縛めよ。

笑へよ、わが涙の道に、  
悟らんと欲するなかれ  
ゆめ欲するなかれ、たゞ  
木の葉のごとくも緑の風に揺げよ。

### かなたの空

手を伸ばせ、よし、あたへられずとも  
青空に、かなたの空に、  
固き土より伸びてゆく芽のごとく  
思ふさま光りを吸へよ。

わたしは愛する、生れたる土を、  
吾を培ふ土を、



わが目は空に燃ゆるがため、  
夢を嘯む土を愛する。

雪のうちから、

春を覚めるもの、

煙りかどやく樹木じゆきに、

はやくも囀る小鳥。

手を伸ばせ、思ふさま、

渦巻く嵐のうちにわが身を抱きしめ、

われと知らぬものの世界に、

わが夢を行へよ。

見るかぎり晴れたる空は  
雲の上にある、  
朝風はこゝろ優しく地を這ひ、  
歌を、新しき歌をそこに揺り動かす。



## まどはし

わたしのなほも疲れて素肌に夢みるものは  
 やすらかな君が髪のにほひ、夜を濕ほして、  
 なほわたしを捉へる良きまどはしさ。  
 白い夜あけの風が窓からしのび、  
 きみの眠りをかいさぐる、  
 白い焔がきみのおもてにくづれて、  
 音もなく夜の薔薇は床にしく。

わたしは白く横へたきみの腕を脱れて  
 消え去る夢のあとにひとり思ひわづらふ——  
 夜を濕したきみの髪の匂ひを。



現 實

薔薇のために薔薇を愛したまふな、  
きみの心なるゆゑきみの膚を<sup>いたは</sup>勞りたまへ、  
花のいのちは花よりほかになけれど、  
花<sup>はなびら</sup>瓣に匂ひを嗅けば危くも散り果てませう。  
荆棘<sup>いばら</sup>のみなる故に君の小徑を厭ひたまふな、  
渴きたるとき泉の遠きを怨みたまふな、

吾はきみの瞳をまことに夢み愛するため、  
險<sup>きこほし</sup>しき道をも階段をも喘ぎゆくもの。



## 正しきエピキュリアン

戀人、

きみの前に獻げられたる果實を、

きみの脣にあつるまへ、

きみの歡ばしき眼をもて楽しく眺めたまへ。

在るものの正しさを愛さむため、

きみの夢みる瞳に吾は惹かるゝ。

戀は廣い自由の翼を伸し、

氣儘なる振舞に酔ひ恍ける、

われらの呼吸づまる接吻を、淫らなる歡樂を、

まことに愛しよろこぶため、

すべてにかゝる夢の清さを戀ひ慕ふ。

たゞその白く優しき手をば信ぜん、

心魅はす瞳を髪をすべて正しく、

露はなる肌に股に良き幸を受けとらむ。

足悩む「過去」の鞭をば遂に脱れて、

喰ひしばられし血の痕をのこりなく拭はむ、

生くるもののみ幸福を賞ふれば

隠れざる眞實まことを常に愛さむ、されど、

みな人は愛するものを見失ふ。



## 鴉

雪は解けて山々は赤い肌を露はした、空は磨かれ、瑪瑙の如く煙り立ち、待つもののある瞳に太陽は光りを蘇らす。あゝすべての夢はおし進む、すべての夢はいま新しく潜めるものを揺り起こす。いま新しくそこより始まる。

地の上の鴉よ、おまへの嘴に何をほこぶぞ。

農人は起きいでて朝まだき霜を踏み、播かれたる種子の芽となる幸を待ち望む。

路もあらはれ緑もねむる、あゝ風は谷間をいでて静かなる空に溶け、樹の枝は光りの中に揺れ撓む、風も樹もまた前方へと進むなり。

地の上の鴉よ、おまへの嘴に何をほこぶぞ。



## 相

あらゆるものの惑はしさ、もどかしさ、  
色と匂ひと光りの織り交ざる感覚の夢、  
されど心したまへ、妖婦のことばを笑ひを、  
そのまゝに牽かれて海へ溺れざる心を。  
すがたはたゞひとつしづかなる波の上、  
蒼海のたゞ中を風うけてひた走る一つの船、  
たゞ人の言ふ言葉のみ君を魅はすサイレンであります。

## 箴言

教へられたる敏しき言葉より脱れよ、  
吾の碑<sup>いしづる</sup>を君の言葉もて記したまへ、  
優しくひらかれたる白き手に、  
夙<sup>いちはや</sup>く胸をどらして接吻を求めたまふな。  
きみの戀人は獵人<sup>きつを</sup>の如く巧みに身をば隠して、  
きみの胸のうちよりきみをば窺ふなり。



## 言葉

わたしの周囲にかす多い言葉が廻つてゐます、幾千百年のむかしから、言葉はあらゆる心をむかしから現はしてをります、あらゆる綴りのうへに、さうして、そのために私も嘆き苦しみ訴へました。言葉は血を、夢を、走る足掻きを、宣誓を、地を、空を、草を、樹を縦横に馳せ交ひます、はじめに言葉あり、言葉は神と偕にあると、しかし、あるときその言葉は石となります。

不思議な力あるものの行ひを、

私はもの憂い額に感じます、

波だち驚く戀人の胸と胸との囁きを、

蘆と蘆との悲しげにすれ合ふ風のひびきを、

あゝ、わたしはすべての上をめぐる吐息を、

切なく、心病む人のごとも感じます。

私のめぐりにあるかす多くの書物のうち、

聖者も痴人も狂人も童子も女も、

すべて美はしきまことを語つてをります、

わたしは子韻と母韻の柵を透かして、

その中に潜む生命を再びとり復します。



しかし、あるときその言葉は全く封ぜられます。

語られたものの禍を過ちを再びせざらむために  
言葉は常に新しき息をすべてに上します、  
わたしらは知らざる淵に探る漁人の心して  
その水の暗き一滴一滴に胸をば躍らせませう。

さうして互にも言はぬ覺悟をもつて、……

あゝ、私を痛ましめ、病ましめたものは語ることでした、  
わたしの愛を自らに感じるとき、

白い指に音なく涙のつたふをきくとき、  
封ぜられたるもののひらくとき、

言葉は、言葉は言ひ知らぬくらやみの奥、

光りを窺ふ魚のごとくも泛みませう

わたしの周囲にかす多い言葉の一切がおし黙るとき、幾千百年のむかしから、  
わたしを泣かしめくるしめた言葉の一切がおし黙るとき、  
その石のおもてに光る寶石に接吻けませう、  
その石のおもてに低く漂ふ不思議な歌に、  
はじめて私のまことの戀をあかしませう。



飛躍

山へ、かの碧の落ちくる山の頂へと、  
一心不亂に攀ぢのぼる人たち、  
わたしらはいまなほ、山を下つた聖者等の  
尊い言葉に耳をば傾けますまい。  
よし、足の萎え、荆棘に傷は血を染めませうとも  
空かき昏る夕暮の恐怖が身に重くとも、  
心の奥に勇ましく「未だなほ」と呼ばはりませう。

往き過ぎた路をながめて賢きひとは、  
この葡萄もなほ酸くあらんと語りませう、  
あゝ吾らは苦い木の實を喰ふ人でした、  
石ばかりの畑から芽をば得ようと  
燕麥の種から麥をば得ようと、  
日ごと鋤とる耕人でした、  
されど愚かな心を奮ひ立てゝ猶もこの道を歩みませう。  
丘にきて海の遠音をきく如く、  
未だ來らざるものをば愛しませう。  
灘をこえてかなたの國へと、  
秋のこぬ前去りゆく燕のごとく、  
良き地へとわが夢をはこびませう。



翼<sup>たば</sup>撓まば海へと落つる覺悟を知つて、  
朗かな聲音を意勢よく、わが命に力をばつけませう。

きみの涙を拭きたまへ、得知れざる命の前に、  
曉をつくりいだすも夕暮を身に來らすも

たゞ君の歩みのまゝ、『時』はいま吾と偕にあつて、  
棕櫚の葉の上に薔薇の冠を投げかける。

あゝ山へ、かの山の頂へと、

一心不亂に攀ぢのぼる人たち、

われらの齒の底に噛みしめる苦<sup>く</sup>い木の實を、

われらは恐れなく味ひませう。

笑ひながらに心を引き立たせ、

いまだ知らざる淵をも窺ひませう。

『未知』と『未來』の眞つたゞ中に

ふりかざす『飛躍』の炬火<sup>たきま</sup>。

夢みる眼にあらゆるものの輝きいだすを

はじめて驚き歌ふまで、

歌ふまで、その壯麗の世界へと、山上の泉へと。



路傍の花



## 吐息

沈黙の庭、秋の匂ひ……

いつかしら夜が潜んでゐる、  
いつかしら月がさしてゐる、

樹の間を零れる光りも蒼ざめ、  
痛ましい影は叢に慄へて、

指を組み結んだ涙と悔のをのき……

池の面には憂愁が銀色に曇り  
繊細い白楊の金の落葉が飛び散つてゆく、  
風……

亂れる光りは樹の葉の暗みに、落葉の上に、  
またわが空ろな腕のうちに、  
涙さめざめとした君の面を……

いつかしら夜が嘆き、  
いつかしら夜が青ざめてゐる。



## 彷徨

暗夜に嵐が騒ぐ……

涸れた水の窪地を、

戦いでゐる蘆の繁みを、落葉の上を、

低く、淋しく吹きすぎる……

その足音——

草は疲れた夢から目醒め、

水は凍えた心にその聲をきくとき、  
破れる悲しみに水鳥は騒ぎ  
その羽音を立て、迷ひ叫ぶ。

池には残された傷みに土が濡り、  
わびしい朽葉はその水に漂ふ、  
夜は洞の腫の奥から生命を窺ひ、  
その寂しい影は暗の中に隠れ沈んでゆく。  
戦ぐ蘆、堪へがたく泣く水鳥……  
睡られぬ恐怖と寒さに、  
目覚めた心はたゞ孤り迷ふ。



月光と薔薇

薄黄に匂つた薔薇のかけを、

軟らかに、しみじみと慕ひより月の光――

濃やかな葉裏を滴れる光りに、

私の嘆きは暖かな青みを帯びて顫ふ。

消え去つた夢の懐かしい影よ、

冷やかな石の道におとされた薔薇の

その一つ一つの花片よ。

おゝ、その夢は今も住む――花の奥、

薄黄の匂ひに青い夜を照らされた薔薇、

ほのやかな薔薇よ。



顫音

櫻が散る、

吐息のやうに瓦斯が射す、

もの音が絶えた公園の夜、

低い噴水がきこえる。

夜が匂つてゐる、

芝生の椅子に、草に、並木のかげに、

髪の香りが漂ふ……  
水は静かに淋しく  
弛い管から噴いてゐる。

白銀の夜が顫へてゐる、

石に沁みてゆく水が咽んでゐる。

華の奥にかくれ去つた夢、

狂ひ舞つた晝の夢、

暗い記憶の底の花弁に

しづかな水が響いてゆく。



ODELETTE

惱ましい椿が落ちる、  
血のやうな椿が落ちる、  
惱ましい午後が光る、  
薄色の春が逝く。  
血のやうな椿が落ちる。

涙

涙は夢の間に泉へ、  
青葉のしげみの谷の深みへ、  
涙はいつも若やかな瞳に  
楽しい故郷を置く。

白い花は路の傍に萎れてゐる、  
熱い日光がその上を焼く、



涙はかくて心をのがれ、  
涙は温かな胸にゆく。

青い森の小鳥よ、青春よ、  
うら若い昔の君よ、手を執つて、  
骨ばつた頬をみつめてゐても、  
私はたゞみつめるばかり。

雑草は焼かれた路傍にしげり、  
美しい青葉は今も露に濡れてゐる。

## LIED

軟かに降りそゞぐ雨、  
花の上に沁みてゆく睡りに  
濡れた花<sup>はなびら</sup>は息づき  
暗の中に顫へてゐる。

しなやかな指をのべて、  
面<sup>ツエール</sup>覆をかるくはづすやうに、



雨は微かな足音を亂して、  
 花の中へ忍び……  
 弛しい甘さに充ちた蕊の匂ひに、  
 滴はゆるやかな接吻をする。  
 草に沁み込んでゆく夜の睡りが動く、  
 葉の細い慄き……花の身じろぎ……  
 私は痛ましい響をきく——  
 甘く溶けてゆく滴に  
 花は破れてゆく。

九月

私は知つてゐる、仄かに蒼ざめてゆく夕月のおもてを  
 秋は音もなく私の庭にきて  
 影と光りは絶え入るばかりに抱き合ふ……  
 私はよく知つてゐる、  
 闇の深い樹の間の光りに、  
 緑の木の葉が微かに息づいてゐるのを……



私はよく知つてゐる、やがて淋しい風が  
そこから吹いてくるのを。

私はその聲をきいてゐる

雨が降る、  
淋しい日に雨が降る、  
濕つぽい冬の夕方、軒では、  
をりをり雀が鳴いてゐる。

暗い魂がこの中に浮んで嘯ささやいてゐる。  
すべて灰色を帯びた空氣が顫ふるへて、



め入りさうな暗い夢が心に落ちる。  
雨はしきりに降つてゐる。

また雀が鳴いた。

私の心はこのじめじめした室<sup>へや</sup>を隔て、  
遠い微かな國の聲をきいてゐる——  
光りが仄<sup>ほ</sup>めくやうに、その鳥の聲をきいた、  
鋭くきいた。

しかし暗い魂はめ入るやうに  
またわたしの心を牽<sup>ひ</sup>いてゆく、  
穴のやうなところへ……

そこには白い墓がみえる、その上に、  
雨はしきりに降りそゞぐ。

また雀が鳴いた。

夕暮の色が迫る、  
曇硝子が惱ましく心にうつる、  
暗い魂は心を穴へ穴へと導いて、  
「なにもなし、何もなし」とさゞやく。  
外には雨の音……  
また、鋭く、  
雀が鳴いた。



——光りの聲！

わたしの耳はこれをきいて窃かに慄く……

白い暮——恐ろしい白い暮——

しかしその傍にはまだ光りが残つて

明かに歌つてはすまいか？

雀はやつぱり鳴いてゐる。

雨の音——

夕暮の色——

私はその聲をきいてゐる。

空は吾らの上に晴れてゐる

晴れ渡つた春の朝、光りが

梢に、屋根に、ふりそゞぐ、

屋根は音もなし。

もの静かな底から、

歡びが湧き出る、

何とも知れない怡しさが



114  
疲れた心から浮ぶ。

巢立つた小鳥は空によろこび、  
伸びやかな翼を旅に向けた。

騒立つ都會の上にも、  
光りは充ちてゐる。

心は伸び上り、  
たのしい「生命」を喜びたい、  
骨の節ぶしが弛むやうな草の上に  
飽きるまで光りを吸はう！  
美しい春、春、  
空は吾らの上に晴れてゐる。

## 賞 讃

Le ciel est au-dessus Iestois — Verlaine

私は美しい樹を見る、春の朝、  
軟らかな光りが梢に、葉裏に縫れるとき、  
空はその上に輝く。

樹は楽しく立つてゐる、  
幹は伸び上り、丘をのぞみ、  
梢は緑に生命を包んでゐる、







泥濘でいせいの車、傘をうつ冷い滴……  
病ひの聲は戸毎の人の靈から、  
路傍の石の濡れた面おもてから、  
疲れた息を微かに洩らしてくる。

幸福を探して歩く旅人は

その倦んだ瞳を路におとして

儚はかない漂泊ひやうはくに嘆かう！

漂泊！ 漂泊……汝おまへの古巢も、ゆく國も立ち消えて、

悲しい現在が悪夢のやうにとりまくその心に、

日ごと、日ごと立ちかへる夕暮は

ものざめた氣ひたひを冷やかに、

寂しい、懶もろい舌で舐めてゆく。

單調な雨の響きよ！

屋根に消えてゆく寂しい響きよ、

このまゝに疲れ倦あぐんで滅入る響きは

だるい悲しみに「生」を引きすつてゆく。

あゝ蒼ざめた雨の布ぬの、

夕暮を彩る暗さ！

濕みを帯びた街燈の黄色な吐息といき——

涙にあぐんだ悲みの光に、ひとり、

ひそやかな雨はたゞ降りしきる……



## 薄暮の瞳

………

また、迷ふやうに薄暮がきた、  
蒼ざめた私の額を曇らす光りは、  
軟かな、つれない匂を室内に漂はす。

ものの隅に擴がる影、  
とり聚めた光り、青みを帯びて顫ふ中に、

疲れた今日の思ひは  
安らかな心を覚めてゐる。

薄暮のひそやかな一とき、  
逃げ去るやうな光りのなかに、  
あわたゞしく迫りよる影の深みに、  
忘れぬ日の髪の香油の漂ひ——  
その白い面——  
なつかしげな瞳は寂寥の中を獨り輝く。



屋根の上に

屋根の上に、

暗くなる雪よ、

木立は慄へ、

空は寥しく被ひかゝる。

そこにわびしい心が夜を待つ……  
たゞ冷たく。

小鳥は悲しく飛び去り  
痛ましい響に雪は枝を落ちる。

心なく立ち昇る煙りは

暗くなる心にさ迷ひ、

濕みを失つた瞳のうちには、

夕暮の燈が奇く光る。

心はそこに夜を待つてゐる、たゞ獨り、  
暗い底のきはみの夜を、  
また火の輝き出す夜を。



秋

秋の空、碧い空。

その空から寂しい光りが泡立つ……

透きとほつた明るさに

鳴きしきる百舌鳥、

黄金色の痛い輝きに、

涙をうかべた稲穂、

その濕んだ、苛々しい悲しみ……

堪へがたい胸に、

林の窪地に、その水の上に、

散り敷いた落葉——

力ない日光と共に

私の心も息づく。



夕

路の並木の上に  
重く被さる雲の色、  
沈んだ息に見返るとき、  
白い「悔」が悲しくかゝる。

……

今日も、

今日も、  
疲れはてた魂……



## 病児の夢

曇り日の病院の窓、  
曇硝子を透く柳、落葉、  
風がさむしく吹く。

看護婦の出でゆく足音、扉のひびき、  
そのあとの沈黙……

曇り日の病院の窓、  
灰色の室の寢臺に、  
瘦れた病児が眠つてゐる。  
褪せたりボンと光澤のない髪の毛が、  
黄ろな淋しい額にふりかゝる。

……  
病児は夢をみてゐる。  
花と、光りと、五月の野原と、  
(をりをり洩らす唇の微笑に……)  
はるかな歌をきいてゐる。

外は風が吹く、



夢を轉まろばすやうに、  
夕暮近い暗さが室をおそふ——  
誰もゐない、  
花と、  
光りと、  
はるかな歌と、  
うすれてゆく……  
——  
少女は夢から醒めた、探すやうに  
見張つた瞳に、いま、  
何を見やう？

さびしい、淋かしいその面おももち……

花と光りの消えたあとの静かさ……

人は誰もゐない、曇り日の夕暮れの病室、  
噉り泣く……風……



小 徑

しづかな、静かな夕暮、  
鳥の噪ぎも林の上に黙まり、  
病みほけた薄色の月が  
路上の落葉にさゞめく。

はげしい白晝の埃に、  
車の轍わだちに、

光りに、  
焦々いらくとした小徑。

悲みと歡びと  
切なげにその蔭に抱き、  
うす闇のにほひに低く  
晝の嘆きが暮れてゆく。

——小徑には  
草にすがる露……  
低い、しかも切ない追憶おもひでが歌ひ、  
淋しい悔の涙は月にかゞやく。



### 暮春の光り

青い草の上に  
ゆく春の光りが煩む、  
燃えるやうな葉蔭の緑が  
午後の空気に息づく。  
眩しい熱を帯びた日光、  
焦々しい空の輝き……  
二人は無言で、離れて、

その樹蔭を歩いた。

晝の空気は白く、しづかに、  
細い蔭の光りが香つて顫ふ。  
胸の中に沁み入る吐息は、  
甘いなかのその煩み……  
慵い戀の疲れ、悲しみ……  
光りの消えてゆくあとの痛み……  
堪へがたいこの沈黙……優しい疲れ……  
たゞ青い草の上に、  
見るともない瞳をすゑて  
二人は何を語らう？



緑の蔭から煩む春の光り、  
 蒸された風の歌……顫つてゐる日光……  
 二人の戀はまた焼かれて、  
 苦しい夏の呻きをきくか？  
 ……たゞ静かな空の光り、たゞ  
 静かな沈黙……  
 そのうちに潜むものの影——動き……  
 青い草の上に  
 行く春の光りが煩む。

月しろ

いつも  
 夜、みる度に、  
 赤く爛れた月しろ……  
 野分の斷れた静けさの間隙に  
 疲れた赤みを投げる光りよ。  
 動亂と寂しみと、



疲れ倦んだ悲しみが一とき、  
初々しい追憶か？……狂ひか？  
飽くない淫慾にたゞれて、  
なほ荒みたく思ふ月よ。

汝のおもては曉に青ざめ、  
悲しい野原の草のあなたに、  
淋しい墓のあなたに、  
やる瀬ない白みを残してゆく……

忘れた悲哀と、一ときの耽溺！  
月は夜ごと、夜ごと、  
まづ、はげしく燃え、

疲れた夢をくり返す……。



心のはて

落葉は散る、胸に、  
色褪めた唇に、  
愛の去りゆく心に。

蒼ざめた額に曳く夕暮の光りは、  
肅やかに心を林の中に包む。  
枯れた樹立には鳥が冷く噪ぎ、

黙れた想は冷やかに夕日を眺める。

おゝ赤みざした日の面、  
落ちてゆく紅い薔薇の面、  
「過去」はしづかに鮮やかに  
彼方の空に落ちてゆく。

目覚めた瞳のうちにはその微やかな落葉、  
水たまりの落葉……  
目覚めた瞳のみ明らかに、  
暗い夢の中に輝く。



丘の上の花

華やかな

日ぐれにみた、

丘の上、

紅い撫子の花。

一日、

二日、三日、

忘れてゐたうちに、  
雨が降つた。

淋しい日、

わたしの心ははげしく、

その花を

思ひ出した。

丘の上、

雨のなかをついて

行つてみた、

紅い撫子の花。



もう、なかつた。  
心も濡れるほど雨が降る、  
わたしはひとり  
丘を下つた。  
たゞひとり濡れて、  
丘を下つた。

鼠

眼が開いた、  
しづかな夜、  
戸棚の金具がすれる音――  
鼠は戸棚を齧つてゐた、  
淋しいしんとした室に、  
ひとり、もの侘びしい音が冴える。



眼が開いてゐる、心も醒めてゐる、  
静かな寂しい闇に、  
私はこの冴えた音をきいてゐた。

寂かな……しかし、耳にこたへる反響。

その音は微かな恐怖と、  
さびしい不安を心に語る、

飢餓————

憐れな生命が彼らにも纏つて  
まだ求めてゐるのか？

あのさびしい冴えた音……

遊戯——たゞさうした戯れ——？

しかし、併し、あの音をきけ、

それにはあまりに深い恐怖と不安が  
動いてゐるではないか？

追つてやらうか？

隣寸をすつたら……直ぐ逃げるだらう、

つよい明りに——彼らの驚愕、ふためき……

(音はまだきこえてゐる)

憐れな音！ 私の神経は妙に亢ぶる。

淋しい音！ いま彼はたゞ嚙つてゐる。

闇と何ものかの恐怖と、斯う謀らむわが心の前に  
たゞ無心に嚙つてゐる。



無心——憐れな遊戯——？

その音には只貪る響が刻々きさまれる、  
後ろに不安と、闇と、  
自分の謀らむ心と。

無心——無心——貪るひどき、  
私には淋しい人間の生活が泛ぶ——  
眼が開いてゐる、闇を凝視めてゐる、  
そしてたゞ働いてゐる人間の顔が見える。

(やつぱし嚙つてゐる鼠の音！)

## 印象

……ふと

\*

恐ろしい心が目醒めて二人……  
心の騒ぎを互にしづめた接吻——  
冷い頬にさはる口の潤みに、  
吐息の匂ひに、  
もうすべてが碎けてゆくやうな悲み。



別れ、

戀の終りの接吻

——女の足音が梯子を微かに下りてゆくとき……  
窓にさす夜の明るみ。

屋根の上には、

露がしみじみと涙のやうに光り、

痛みを帯びた青い月の光りは

うす暗くその上を照らしてゆく……」

\*

今日すべてのものが

忘られてゆく夜……

しかし痛みも苦しみも、

たゞ氣倦く沈んでゆく……夜、

……

眼が覺めたとき、

庭の草に

しづかな秋の雨が

しとしとと降つてゐた。



## わかれのとき

緑の草間の嘆き……水のせらぎ  
木の葉の微かな耳語……蟲の聲……  
静かな沈黙が香つて顫ふ蔭に  
抱いた二人。

その夜、青い月が輝く、  
木の間<sup>ま</sup>にさどめく光りも明るく

梢を偷み、葉うらを洩れて、  
二人の肩を照らす。

緑の草間の嘆き……蟲の聲  
楽しい嘆きに揺ぐ吐息、  
甘い悲しみにとける別れのとき！  
いく度か、いく度か、つよい抱擁<sup>だいきしめ</sup>、  
接吻<sup>せつぶん</sup>の音。

青い月はしづかにのぼる。  
嘆きにはずむ胸の高まりに  
「なぜ、別れるのでせう？」と低く  
吐息に交る言葉。



しかし夢のやうな甘さは  
絶えず血をふるはして  
この甘さを「長く長く」と啜く。  
緑の草まの嘆き……蟲の聲……  
青い月は明るみを加へて  
樹の間の二人をつよく照らす。

暴風のあとの海岸

白——

明るい海のにほひ、  
濁つた雲の静かさ、

白——灰——重苦しい<sup>けいれん</sup>痙攣……  
腹立たしいやうな、



搔き捲つたやうな空。

藻——流木——

磯草のにほひ。

白——

岸と波とのしづかさ。

——忘却——夢——

苦悶の影——

白——

波の遠くに遠くにひびく

夢のやうな音——狂ひ——嘆き——

——白

——濁り——風

風——

しづかな音

風——

白——



音

夜――

眞暗な磯にうつ伏して、  
砂の上に耳をあて、  
ものの聲をきいてゐた。

海は眠つた、

ふかい深い夢に落ちてゐる、

岸と吻め合ふ喃語も聴えない、  
空に星も見えない、  
風もない、冷い空気が土を這つて、  
砂がじめく／＼濕つてゐる。  
「死」といふ思ひがくる、  
幽かに耳が鳴る、  
「静寂」――「死」と  
互みに二つの翼が  
身を蓋ぐ  
「死」――「静寂」  
いくたびとなく考へた、  
眼を瞑ぢて



砂にうつ伏して。

しかし

なにもも得なかつた。

たゞ懐の時計は

微かに、かすかに

秒を刻んでゐた。

### 壁のうちに

壁のうちに

聲がする。

「なぜ、生れたのだらう？」

耳を澄して

きいた——



.....

自分によく睡つてゐた。

小 景

苑の樹に

蜘蛛の巣――

蛇が来た、

蛇は高く飛んだ、

蜂が来た、



——蛇を眼がけて飛んだ、蛇を捕へた  
運命は至つて簡單だ！  
花の樹に  
蜘蛛の巣！

曇 天

曇天——  
風——  
濁色だくしよくの空——  
涙の色  
林  
落葉の音……



土に蟲が鳴く、しきりに……

風——

空は肺病みのやうに

光りの瞳が暗い、重たい、

私はこそこそと

林の中を歩いた、

踏んでゆく落葉の音……

葉が落ちる……

風——

消えてゆくマンドリンの縫れ！……

……音波……夢……

ほうけた面——

女の顔

不安——

ちつと檜の樹によりかゝつた。

蟲の聲……

風——

褪めたやうな色……

……

私は狂ふやうに走つた……

悲しい……



眞赤な火に燃えたい！  
なぜこんな處にゐるんだ！

風は唸るやうに嘯いた、  
檜の樹は動いた  
木の葉はハラ／＼と亂れた。

「泣け、泣け、

さめよ、さめよ……」

眼がパツとしたやうに、  
私は白い空を見た——

「泣け、泣け、

さめよ、さめよ」

萬物は光りがなかつた  
白い死人のやうだつた

風は

洞から、洞へ……重く、苦しく……。

濁色の空。



曇 日

曇つた日だ、  
雨の降りさうな日だ、  
晝の蟲がきちきち鳴いて、  
何處かで女の歌がきこえる——  
悲しい聲で——ながく曳く聲で。  
淋しい日だ、

楢の林に風が鳴つて  
しづかな木の葉が軽く落ちた。  
遠くで、かすかな午砲の響が  
消えて、幽かに耳が鳴つて、  
慵<sup>もろ</sup>げな、厭<sup>いや</sup>な、苦しい日だ、  
重<sup>おも</sup>たい空がしくしく泣いて  
ふかい溜息が空気に觸れる。  
セロの低い調べが葬の曲を  
どこかで……また  
萎れた花のかをりが……  
あゝ厭な女の笑ひを、夢を、  
いやな、厭な夢を。



曇つた日だ、

さびしい日だ！

濕つた香油の匂ひが動いて、

重苦しい思ひがかさなつて

土のなかへ、どつかへ……

私は何處へゆくのだらう？

灰色の空をした、厭な日だ、苦しい日だ、

土の下で、白晝の蟲が泣いてゐる！

厭な日だ！

ふつと林の向うの野の末に

煉瓦の工場が見える、赤い旗がみえる、

うすい煙が暗い空に

かるく昇つて消えた。

苦しい日だ、いやな日だ、

私は何處へゆくのだらう？

土へ？ 遠くへ？……

否、否、わたしは

この寂しい思ひに暮れて、

やつぱし此處にゐるんだ！



## 塵 塚

隣の家の穀倉の裏手に  
臭い塵塚が蒸されたにほひ、  
塵塚のうちにはこもる  
いろいろの芥の臭み、  
梅雨晴れの夕をながれ漂つて  
空はかつかと爛れてる。

塵塚の中には動く稲の蟲、浮蛾の卵  
また土を食む蚯蚓らが頭を擡げ、  
徳利壘の腐片や紙の切れはしが、腐れ蒸されて、  
小さい蚊は喚きながらに飛んでゆく。

そこにも絶えぬ苦しみの世界があつて  
呻くもの、死するもの、秒刻に  
かぎりも知れぬ生命の苦悶を現し、  
闘つてゆく悲哀がさもあるらしく、  
をりくは悪臭にまじる蟲虻の  
種々のをたけび、泣聲もきかれる。

その泣聲はどこまでも強い力で



重い空気を顫はして、聽てまた、  
暗くなる夕の底に消え沈む。  
惨しい「運命」はたゞに悲しく  
いく日いく夜もこゝにきて手辛く襲ふ。  
塵塚の重い悲みを訴へて  
蚊は群つてまた喚く。

### バタの鐘

戸棚の隅のバタの鐘――  
半は屠りつくされて  
臭み蒸された油の香  
はげしく香ふ棚の中

壁には微の花が咲き、  
うつらに暗い夢を見る、



暗い世界に瞬いて

ほのかに光る曇の色――

こゝには狭い厨房から

かすかに洩れる日のかげが

わづかにももの差別する

生命の鈍いうす光り。

これに照らされ微かにも

浮び出されるもののかげ

青に、茶いろに、紫に、

膳のかげ、また皿の色。

浮び出された光りには

不安の「生」が仄びかる。――

暗い世界に置かれたる

あらゆるものの閃めき。

匙やフォークの光りにも

まして一きはパタの罐――縦横に

ナイフの痕をいれられた

罐の負傷はもの凄い光りに閃る。

戸棚の隅のパタの罐――こは

恐しい残虐の手がある日かくも傷けた

癒えぬ苦痛を疼かして



呻きながらに訴へる。

つよい輝き、恐ろしい世を照る光り、  
戸棚のなかにかき潜む  
暗い痛みを投げ出して  
鏝てきの負傷は光つてる。

## 雨

さびしげに瓦を敲く雨の音、  
厭いとな空氣のたゞよひが  
陰濕しんめりとした室内しつないに  
ものわびしい心に重く被かぶさつて。

夕べに近い曇り日の  
空からは降る雨の粒つぶ、



ぼつり、ぼつりと暗い音に  
瓦を敲き滅入る音。

白み疲れた面ざしに  
君はわが手をつと握り、  
かるやかに照る愛の火の  
脈の流れをかよはして、  
ふとわれも見ると君が頬に  
細い涙はかい濡れて  
言ひえぬ愛の悲しみは  
瞳にあつく燃えあがる。

「淋しい日だ」と友は云ふ、

明ける障子をまた閉ぢて  
室をふりむくその時に。

隣の部屋の薬の香はげしく匂ふ、  
外には暗い雨の音  
瓦をたゞき……



## 救

あゝ大寺院、……

GOTHIC式のほの暗い寺の拜壇、

冷やかな石に零れる燭の火の冷い光り、

窓の硝子の色ふかい飾模様は夢を見る。

壁に刻んだ ACANTHUS 柱は唐草

白く動いた彼方には銅の聖母の瞳、

軟かな花のにほひと薫香の香と

あたりを回る静けさは耳に反響し

ふりかへる室の隅々。

立ち慄へをのゝく石の、蒼白い聖徒の裸像、

肉も血も寒い光りに冷え凍り顫く蔭を、

かるやかにわたる『智識の悲み』と

『信の憂ひ』と。

寂しげに『生命』はこゝを幾迷ひ、

荒み疲れた心には憧憬の切ないひまを、

あゝあの火、あの冷かな石の壇、

金の十字は燦々と、(今もなほ)

『こゝに救ひはあり』と照る。



## 港

夏の眞晝の一時過ぎ、  
港には浮く舵の音、  
汽管のさけび。

腐れ爛れた血の色に  
檣にかゝる船の旗、  
暑い日は射し、蒸し蒸しと燃え立つ光り、

濁り淀んだかゞやきに  
甲板に動く人の群――

藍色服の水夫らは  
みだれ重る帆のかけに  
煙草燻らし、夜なかの廓の話し  
高らかに嘲む笑ひと、拍子とる  
猥らがましい歌聲と。

やがて、いま、  
錨を絡む蒸力の強い呻きと、  
燻つたものの匂ひと。



船橋に鈴の響が二度、三度――  
 船は出る、いま、  
 港には赤いチョッキの税關吏、  
 積荷を運ぶ人のかげ、  
 陸には白晝の日に焼かれ、  
 怖れつい立つ煉瓦屋が  
 幾棟となく立ち並び――  
 船は出る、いま、  
 海洋の際涯ない恐怖の上に。  
 白日のかゞやく寂しみを  
 汽管に細く呻かして。

空の果には吾もみる

空の果てには吾もみる  
 ほのかに薄き雲を、また  
 日の輝きを。

疲れたる秋の日の午後の静けさ、  
 蟋蟀の草間にすだく  
 いたましき聲をきゝつゝ。



空の果てには吾もまた  
ほのかにうすき白雲を、  
日の輝きを見るなれど。

## 畏怖

夕ぐれの榛はんの木の赤き梢に  
何ものかのぞけるけはひ、  
盲まひたる灰色の大空の薄暮がれ  
なにもか覗けるけはひ。





◀ 集詩虹柳路川 ▶

大正十年五月一日印刷  
大正十年五月十日發行

(定價壹圓七拾錢)

著者

川路柳虹

發行者

東京市牛込區矢來町三番地  
佐藤義亮

發行所

東京市牛込區矢來町三番地  
新潮社  
電話番町  
八八八  
三九〇  
六九九  
番番番

番二四七一(京東)替振

印刷所

東京市小石川區西江戸川町  
電話小石川五九二番

富士印刷株式會社  
印刷者 佐々木俊一

川路柳虹詩集

畢



現代詩選

第一圖 百田宗治詩集 (既刊)

— 定價壹圓五拾錢、送料八錢 —

第二圖 川路柳虹詩集 (新刊)

第三圖 富田碎花詩集 (續刊)

第四圖 柳澤健詩集 (同)

• し可す行刊々續下以 •

版出社潮新

■詩集 野天の光り千家 元麿氏著 定價壹圓五拾錢 郵送料八錢

■詩集 蘆間の幻影 三木露風氏著 定價壹圓參拾錢 郵送料八錢

■詩集 展 望 福士幸次郎氏著 定價壹圓貳拾錢 郵送料八錢

生田	靈魂の秋	定價七拾五錢
春月	感傷の春	定價七拾五錢
氏著	私の花環	定價壹圓拾錢
		郵送料八錢



詩話會編

詩壇の黎明に先づけるものにして、三十三詩人の會心の作を集む。多くは新作也。

現代詩人選集

絹袖表紙最上製  
四六版三百廿頁  
定價貳圓五拾錢  
郵送料拾貳錢

現代十名家詩選

生田春月 河井虹若 川柳春明 加藤介春 蒲原白秋

木下李太郎 兒玉花外 西條八十 佐藤惣之助 山宮省吾

千家元麿 竹友藻風 茅野蕭々 富田碎花 野口米次郎

萩原朔太郎 人見東明 日夏秋之介 福田正夫 福士幸次郎

正富汪洋 三木露風 室生犀星 百田宗治 柳澤健鳥

與謝野晶子 與謝野寬 橫瀬夜雨

詩壇年鑑

日本詩集

一九一九年版

定價壹圓五拾錢 郵送料八錢

一九二〇年版

定價壹圓八拾錢 郵送料拾錢

一九二一年版

定價 郵送料拾錢

現下詩壇に名を列する約四十有餘氏の自信ある作物を集め、詩話會同人嚴選の下に一巻となし、泰西詩壇に倣うて毎年一回刊行す。我國詩壇の最高水準を示すものなり。

泰西名詩選集

小形特製極美本  
一冊定價壹圓宛  
郵送料金六錢宛

第一編 ■ ハイネ詩集

生田春月氏譯

第二編 ■ ホイットマン詩集

白鳥省吾氏譯

第三編 ■ ゲエテ詩集

生田春月氏譯

第四編 ■ エルレエヌ詩集

川路柳虹氏譯

第五編 ■ トラウベル詩集

福田正夫氏譯

第六編 ■ カアペンタア詩集

富田碎花氏譯

第七編 ■ 現代佛蘭西詩集

柳澤健氏譯



的代表

# 名作選集

明治大正の傑作全集  
定價は破天荒の至廉  
賣高既に百七十萬部

▼▼羽二重表紙  
▼一册五拾五錢  
▼送料一册六錢

第一 牛肉と馬鈴薯 獨歩	第十三 耽 溺泡鳴	廿五 物言はぬ顔 未明
第二 坊つちやん 漱石	第十四 明治詩歌選 六家	廿六 ふところ日記 眉山
第三 蒲 團花袋	第十五 戀ざめ 風葉	廿七 體の皮 小劍
第四 透谷選集 透谷	第十六 別れた妻 秋江	廿八 女役者 俊子
第五 春 (上) 藤村	第十七 はつ姿 天外	廿九 南小泉村 青果
第六 春 (下) 藤村	第十八 お艶殺し 潤二郎	三十 少年行 星湖
第七 わが袖の記 櫻葉	第十九 俳諧師 虛子	卅一 啄木選集 啄木
第八 爛れ 秋聲	第二十 煤煙(上) 草平	卅二 運命の丘 抱月
第九 平 凡四迷	廿一 煤煙(下) 草平	卅三 和 解直哉
第十 高野 聖鏡花	廿二 子規花 枕子規	卅四 末 枯万太郎
第十一 何處へ 白鳥	廿三 そ の妹 實篤	卅五 善心惡心 孿
第十二 今戸心中 柳浪	廿四 旅 役者 幹彦	—— 以下續々發刊 ——



終

